まほらジカルテット

留龍隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まほらジカルテット

【Ｎコード】
Ｎ８２１１Ｕ

【作者名】
留龍隆

【あらすじ】
かつて人類を繁栄に導いた技術「魔術」は衰退し、代替として使われるようになった偽物の魔術「偽術」が発達した世界にて。研究所で働く青年、紅林吾朗は偽術を扱う資格を持つ「偽術師」であった――ただし、その等級は最低の「四級地方偽術師」。年下であっても等級が上の人間にはあごで使われ、彼は日々鬱憤を積もらせつつ仕事をしていた。
そんなある日誘拐事件に巻き込まれた紅林は助けた少女、渡良瀬

まほらに言い放たれる。「結局、この程度のことしかできないの？」と。わけもわからず罵倒され、さらに鬱憤を溜めこむ紅林。だがその時、まほらと紅林には脅威が迫っていた……架空技術アクション・異世界ファンタジー風味。

0　魔法使いの決意と嘆息

『大人』というものは自ら進んでそうなるものではなく、周りに認められ成立するものらしい。

だから「早く大人になりたい」と足掻いたり悩んだりする子供がたまにいるが、さほどその行動に意味は無いと考えられている。なぜなら世間一般には「そんな無駄な努力をしているのはまだ子供である証拠」と理解されているからである。

そして続けて『大人』は言う。「安心していいよ、何もしなくたっていいよ。時間の流れが思春期の若さも青さも、ついでに夢と希望と万能感も削り取ってくれるよ」と。

だが当然、『今』の自分の尺度だけを用いて子供の気持ちに近付こうともしない大人から言い放たれるそうした言葉は、子供の心には響かない。

子供たちが目指す大人というのは、子供を諭す大人が言う『大人』のように『現在の自分』に照らし合わせて捉えた特徴からカテゴリとして生み出されるつまらない枠組みではなく。現在の自分が持つ能力、まだ見ぬ可能性、未来に対する有り余る想像力の余地。それらが積み重なって強くなった思いが生む、カテゴリではない個としての『自分の理想像』なのだ。

大人になれば、かけっこでもっと速く走れるかもしれない。難しい本を読めるかもしれない。ニュースが面白いのかもしれない。コーヒーがおいしいのかもしれない。

理想像にはそんな夢と希望が詰まっている。「かもしれない」という可能性が強い力を持ち、己を大人へと導いてくれるのだと固く信じているからだ。

しかし。しかしだ。

周りにある日「認められてしまい」、己が大人になったのだと「実感してしまった」その時。多くの人が気付いてしまう――世界を知ってしまって、自分を知ってしまって、人の想像の限界すら知ってしまい、結果気付いてしまう。

『大人』は万能ではなく、ほとんどの可能性が閉ざされている存在だということに。

……もちろんそれは決して悪いことではない。可能性とはすなわち危険性でもあって、安定からかけ離れた険しい道だからだ。そんな道を進み続けるのは容易なことではなく、いずれは先細った可能性が己の首を締めてくるかもしれない。

ゆえに安定を得るべく、自分と周囲を守るため、自ら可能性の扉に鍵をかける。『大人』になるとはそういうことだ。社会のためには多くの人がそうなって、そうあり続けるべきなのだ。

「……でも、俺は」

誰にともなく、かつて子供だった彼はつぶやいた。

「でも、俺はさ」

誰にともなく、なおも大人になりきれない彼は言った。

「魔法使いって夢、いいんじゃないかと思うんですよ」

彼が制するように、庇うように差し出した右腕の後ろで泣いていた少女は、彼の言葉を聞いてようやく顔をあげた。

「子供っぽい夢だと思うでしょうけど。魔法使い、つまりはかつての魔術師のようになることが目標なら、それはそれでいいんじゃないですか」

彼は自分でも、言うべきでないことを言ってしまったと自覚した顔つきで、なおも『大人』を睨みあげつつ言いきった。少女の涙は止まる。次に彼女は目を閉じて、彼に訪れる災難から意識を逸らしたと彼には見受けられた。直後、ガッと鈍い音が響いて彼は壁に叩きつけられていた。白い壁に薄く赤い血がにじむ。

『大人』はなんと言ったのか。ただ彼の言葉の軽率さを責める言葉を吐いたことは確かだったが、怒りのあまり呂律が回っておらず細かい内容は彼にも聞き取れない。ひたすらに自分の優位性と自分以外の愚劣さを主張する『大人』は、彼の目にはひどく卑小な存在と映った。

「……だ、か、ら」

そういう態度だから、『大人』は嫌いなんだ。

彼はそのように口を動かそうとしたが、次に叩きつけられた時の打ちどころが悪かったのか、意識を失う。白い部屋の中を最後に見渡した際、彼が見たのは同級の、同じ境遇で育った者たちの不安そ

うな顔。

先導者が不在となることを嘆く、仲間たちの顔。仲間の表情を読み取った彼は、落ちていく意識の中でひそかに決意していた。

もうこんな場所は要らない。ここに閉じこもる必要はない。自分にできることはわかった。すぐにでも始めなくてはならない。誰より自分のためにも、それが臨むべきことだと。

彼のその後を仲間は知らない。

ただ夢を守られた彼女だけが、彼の行く末を気にかけた。

……その日、ひとつのマジュツが生まれた。

1　雑用研究員は溜め息をつく（前書き）

本編スタート。

1　雑用研究員は溜め息をつく

たん、とエンターキーを打ちこみ、報告書は完成した。一瞬の間をおいてあー、とうめきながら背伸びした紅林吾朗（くればやしごろう）は危うく椅子ごとひっくり返りそうになって、下半身に重心を移す。

「うおっと」

残業を持ち帰らずに済んだ安堵から、気が抜けたらしい。着地の衝撃で机の上で横倒しになりかけたコーヒーの缶を慌ててつかんだ紅林は、部屋の時計を見つつ中身の残りを呑み下す。

時刻は六時半。定時で帰宅した上司は既にテレビでも見ながら一杯やっているんだろうと思うとやるせないが、この解放感を味わう時は何にも勝る至福の一瞬である。上司のことはかぶりを振って忘れることにし、紅林はノートパソコンの電源を落とすと鞄を片手にその場をあとにした。

町外れの斜面を削って建てられた灰色の四角い建物は、振り返ると薄闇に飲み込まれていく途中でなんだか薄気味悪い。守衛から聞くところによると、近所の子供からは「あくのほんきょち」などと設定付けをなされてしまったという。大層な話だろ、と紅林から鍵を受け取った守衛は嘆息する。お疲れ様です、と紅林は会釈した。

門の横の通用口から出て、悪の本拠地、もとい、自らの職場の名？東海地方大竜地脈第三組成研究所？と記されたプレートを撫でる紅林はワークコートの襟を正すと歩き出した。十月に入りちらほらと落ち葉が舞う頃合いになってきて、研究局のある斜面の木々も色づきはじめている。寒くなる前にと購入したコートは、今はまだ少し暑いようにも感じられていた。

「帰ったら夕飯食って、買った本読んで、明日は休みだから研究の方を……」

独りごとを言いつつ広い道に出ると、周りにあまり高い建物が無

いために遠くまで見渡せる景色を眺めることとなる。ここに紅林が移り住んで早数年、今では慣れた光景だが、じっくりと見つめるとやはりどこか異質だ。

「ふーむ……」

普段は単なる田舎にすぎないこの町はこの時間帯、一本の境界線によって二つに切り分けられる。その境界線を作り出しているのは、この町の地形だ。東西は二キロ、南北は三キロ弱という長方形に近い町は、ぐるりと崖に囲まれていた。

崖といっても五メートル、一〇メートルのものではない。日本地図の中へ巨人が足跡を残したかのように、ぽっかりと。平均五〇メートル、場所によっては七〇メートルにもなる崖がそびえたち、その高低差によりこの時間は崖の縁で西日が遮られ、町を分割する光と影の境界線が生まれるのだ。

いま現在、八尾（やお）というこの町だけでなく全世界の至るところにこのような穴があいている。

六十年前の大戦の折に沈んだこれらの土地は地脈断層大地と呼ばれ、研究所が建てられていることが多い。そして日本の地脈断層大地は全部で三十七ヶ所あり、紅林の勤め先の名称に冠せられた？第三？とは三十七ヶ所中、東海地方には九ヶ所を数えるうちの三番目ということを示している。

境界線はずずずと少しずつ移動していき、町を影の中へ飲みこんでいく。己を閉じ込める柵のごとくそびえる崖から逃れるように、紅林は帰路を急いだ。

さびれてシャッターが下りているばかりの商店街と、断層の上から降り注いだ滝が源流である幅の狭い川を越えて。田舎らしいあぜ道をすたすた歩き、舗装された道へ出る。その通りから両側を林に挟まれた道へ方向を定め歩くと、隠れ家のように佇む洋館が現れた。

「ただいま、っと」

つぶやいて紅林が鍵を握る。
レンガを積んで形作られた白亜の壁面は、ひび割れとツタが這いまわる。表面はすすけて黒ずんだ色合いで古さを晒してはいるものの、決してそれだけに留まらない年代を経てこその風格らしきものが窺えた。ドアの上部ではランプに灯りが点っており、紅林はほうと一息つく。
薄青に透けて見えるガラスをはめ込まれた両開きのドアを抜けると、ホールがある。天井からは小さめだが輝きを振りまくシャンデリア、それと高さを同じくして二階の回廊が見えた。玄関先で靴を脱ぎ、磨き抜かれた大理石の床を斜めに横切る紅林は、そのまま一階左奥に位置する己の部屋へ引っ込んだ。
コートを脱ぎ捨て襟元のネクタイを緩め肩にかかったサスペンダーを下ろし、ベッドの縁に腰かけて鞄を放り投げる。机の上に滑り込んだ鞄は、窮屈そうに本を押しのけて動きを止める。本の山を崩しかけたことに気付いた紅林は、あっと声をあげてまずいことをしたと気付き、今後は乱雑に物を投げないことを心中で誓う。
ホテルの一室に似た内装の部屋は、床にも机にも棚にも本や書類が溢れており、部屋の主たる紅林以外はまともに歩くこともできないほどだった。とはいえ汚いわけではなく、ほこりやゴミが溜まっているわけでもない。単に本の置き場がなく、また彼にとって手を伸ばしやすく把握しやすい位置を模索した結果がこの有様なのだ。
「吾朗、帰ってきたのかい」
ぐったりとベッドに伏していた紅林に、ドアの外から声がかかる。身体を起こした紅林は、脇においたコートをつかむとドア近くのフックに引っかけ、ノブを回して来客を出迎えた。
ドア横の壁に肘をついていた彼女、如月三月（きさらぎ やよい）は腰に届くほどの長さを誇る緑の黒髪をたなびかせ、鋭いまなじりから飛ばす視線で紅林を見下ろす。身長差があるために見下ろされてしまうのはいつものことだったが、ネクタイを外して胸元のボタンを外し、タイトスカートに包まれた足を交差させている彼女の様は少々扇情的とも映

った。
が、ころころ笑う彼女の片手にはバーボンの入ったグラスが握られており、ごくわずかに朱の差した頬が既にできあがっていることを示唆していた。シャツの襟元が緩いことも、酔って暑くなってきたがためだろう。三月に他意はなく、酔っ払いの介抱という面倒事の未来だけが紅林の眼前にぶら下がっていた。
三月はすわった目でじっと紅林を見下ろし、彼の疲れた様をつぶさに観察して、言った。
「おかえり。報告書はちゃんと片付けてきただろうね？」
「家で仕事したくねぇからな。先週の地脈魔力粒子反応実験の経過報告も合わせて作っといた」
「それは御苦労さま。ワイルドターキーあけたからあんたも呑むといいよ」
「俺はまだ未成年だ」
片手をあげて断ると、自分を見下ろす三月の横を通り過ぎて、キッチンスペースに入り冷蔵庫から残り物の食事を引っ張りだす。キッチン奥の八人掛けダイニングテーブルに自分の食事だけを並べ、向かいに座った三月がグラスにバーボンを注ぐのを横目で見ながら、手を合わせる。箸を手に取り、もくもくと食事をはじめた。
「教授は夕飯済ませたのか？」
「作業場へこもってるから、今日明日は食事要らないそうだよ」
「そうか」
「あんた、私には聞かないんだね」
「どうせまた減量中だろ。そのくせお前酒は呑んでるってんだから、かける言葉なんて見つからないんだよ」
白飯と、炙った薄切りの牛肉を口の中に放り込みながら、紅林は三月の呑むバーボンのボトルを指差した。反論できず言葉に詰まった三月は「それは置いておいて」などと話題を逸らし、ついでに視線もあさっての方へ逸らした。
「して、実験の経過はどのようなものだったかな？」

「山井(やまい)が作業続けてるが、昨日と大して変わってねぇよ。魔力粒子の励起状態を維持させてる」
「ならいいのだけど」
「つうか経過が知りたきゃ自分で見とけばいいだろ……なあおい、首席研究所長殿」
　自分に仕事を押し付けて先に帰宅し酒をあおっていた目の前の上司を睨めつけながら、紅林はもぐもぐとほおばった飯を咀嚼した。ぎぎぎと首を動かして、三月はさらに大仰に視線を逸らしていた。せっかく話題を変えようとしたのに、藪蛇であった。紅林は続ける。
「ただあれだな、六日前の朝に起こった魔力値変動が気がかりだ。この辺の地脈全体で、かなりがくっと下がってたろ」
「それ、あんたが何かしたわけではないだろうね」
「馬鹿言え、俺は忙しくてそんなイタズラ仕掛けてる暇なんざねぇよ……さあそろそろ仕事の話は終わりにしてもいいか？　家に居る時はなるだけ仕事から離れたいんだ」
「大して残業してるわけでもないだろうに。今日もたったの一時間半ぽっちじゃないのさ」
「じゃあお前がやれよ」
「いやだね、私よりあんたの方が効率よくやれる」
「じゃあせめて残業代出せよ」
「給金は私の一存で決められることではないんだよ」
「じゃあ個人的小遣いをお前から」
「却下」
　つれない態度でグラスを傾けた三月に向けて下唇を突き出した紅林は、舌打ちして茶碗の白飯をがふがふとむさぼった。
「劣悪な労働環境を作るお前に所員率いて反旗を翻すぞ」
「あんたにそんな人望があったとは驚きだよ」
「いや、人望なんて無い。だが人間煽動するには結果さえ見えてればいいんだ、発端は脅しでやらされたんだとしても結果として労働環境が改善されりゃ誰も文句言わねぇだろ」

「ストなんて起こされても所員が取っ換え引っ換えされるだけだと思うけどなあ。そも、あそこは私のワンマンアカデミーだしね、頭の私さえ抜けなければ上はどうでもいいのだと思うよ」
澄ました態度で笑う三月に、紅林は心底がっくりきた様子で箸を止めた。三月が黙ってもうひとつのグラスにバーボンを注いでそっと差し出してきたが、紅林は受け取ることなく椅子の背もたれに深く寄りかかり、頭を抱えた。
「少しくらい俺にやさしくすることを覚えろよ。大体だ、たしかにあの研究所はお前のワンマンアカデミーだがな、研究成果の七割弱は俺が出したものだろうが。対応をもう少し改善していただけないかと進言します」
「意見を却下します」
「なぜだ」
「なぜならその七割弱のうちの七割に山井と私が関与しているから。いわば実働部隊が私たち二人だから」
「おい、おい。実働がお前らっつってもそこに至るまでの主導と実験内容の提示とその他雑務と報告書と、ほとんど俺がやってんじゃねぇか」
「でも私たち抜きではまず実験自体ができないはずだね。あんたには？資格？がない」
返す言葉に詰まり、紅林は椅子にもたれて見上げていた天井から視線を落とす。目の色だけが奇妙に酒におぼれていない、不思議な表情をした三月が、じっと紅林の脇腹の辺りをみていた。
視線を振り払うように立ち上がった紅林は、冷蔵庫の方へ歩きながら流し目で三月を見やり、苦々しげにつぶやく。
「窮屈な国だなここは。某国にヘッドハンティングでもされねぇかな」
「昔ならいざ知らず、いまのあんたをわざわざ引きぬくモノ好きはいないね。私以外には」
恩着せがましく己を指差す三月に、紅林は何も言わず冷蔵庫の扉

を開ける。ジンジャーエールのペットボトルを開けると中身を呑み下し、こみ上げる吐息を胃の腑に納めた。
と、紅林の背後、ホールの方からただいまーと高い声が響く。振り返ると、肩までで短く整えたショートボブの髪型が良く似合う、背の低い少女がいた。豊かな感情をそのまま前面に押し出す表情と、少し気の強そうな印象の目元を明るい喜色に染めながら、ぱたぱたと紅林に駆けよってくる。
「ただいま戻りました、師匠」
「おかえり律希（りつき）……そして、できれば師匠と呼ぶのはやめよう」
「ヤです。師匠は師匠なんで」
紅林が諦め半分で呼び名を改変することを求めたが、本日もやはり諦めるしかなかった。
飾り気の無いデニムのジャケットと黒いパンツを着こんだ彼女、桐原律希（きりはら りつき）は照れた笑みと共に紅林の横をすり抜け、奥のテーブルにいた三月にもただいま帰りましたと報告をしていった。グラス片手にひらひらと手を振るだけの反応を見せる三月の前で、律希は紅林の食べかけの夕食に箸を向け始める。
「まて律希、俺の夕飯だそれは」
「え？　いやすいません、バイト先で今日はまかない出なかったんですごめんなさいもぐもぐ」
「食べるな」
「別に一食くらい抜いたところで死にはしないだろう。けれど律希は成長期だし、これはもうお腹が空いてても仕方がないね。たんとおあがりよ」
「わーい」
「三月、お前も酒抜いたところで死にゃしねぇよ早く禁酒しろ。……あと聞きたいんだが、俺はもう成長期、終わってるのか」
「あんた、もう十八歳だったろう」
グラスを置いて立ち上がった三月は、女性にしては長身で一七〇センチ近くある。ふらふらと歩いて紅林に近付いて、見下ろした。

わざとらしく自分の背丈を手で測り、水平に紅林の頭上へその手を移動させることで身長差を明確に示した。目測で四、五センチ、掌と頭上の間に隙間が生まれていた。
憐れむように鼻で笑い、三月はテーブルに戻っていく。
「ご愁傷様」
「うるせぇまな板」
すかさず紅林に反撃の言葉を投げつけられ、笑いかけていた三月の表情に亀裂が入る。
三月は身長高く脚も長く、非常に均整のとれた体つきをしていたが、いかんせん胸囲だけは成長が芳しくない。六つも歳の離れた、今年十六歳の律希にさえ敗北を喫していた。
「腹筋と大胸筋の天下分け目はどこだ」
「そんなに筋肉ばかりなわけないだろうばか！」
「ドラム缶みたいな起伏の無い胴体しやがって」
「それ以上言われるとへこむからやめなよこの性悪ホビット！」
不毛な言い合いに我関せずと無関心を決め込み、律希はもくもくと紅林の夕食をたいらげつつあった。肉もサラダも白飯も好き嫌いせず息つく暇も無く、ぱくぱくと素早い箸の動きで口に運ぶ。紅林は時折横目で律希を見て、言い合いの仲裁か加勢にでも入ってくれないかと期待したのだが、てんで動く気配は無い。どっしり構えて食事中である。
やがて脇によけてあったジンジャーエールもごくごくと飲みほして、満足げな顔ではー、と溜め息を漏らした。わずかな間に、皿もボトルも綺麗に空になっていた。律希は手を合わせてごちそうさまでしたと誰にともなくささやき、言い合いを続ける二人の間を縫ってキッチンへ移動する。関わる気は一切ないようだった。
そしてそろそろ取っ組み合いの争いにでも発展しようかというほどに二人の舌戦が白熱してきたその時、またホールから声が聞こえてきた。
「ダメだ――――っ！」

轟いた叫びは、ホールで反響して余韻の残滓を振りまく。先の一声が消えやらぬうちに、また叫びがホールいっぱいに広がる。
「ダメだダメだダメだった――――っ！」
紅林と三月が言い合いを中断してホールの方をのぞきこむと、二階奥の部屋から飛びだした男がもじゃもじゃとうねる頭髪を掻きむしりながらホールへ続く階段を下りてくるところであった。どんよりと落ちくぼんだ瞳と屈曲した背中が、ほどよく気味悪い印象を投げかける。
白衣をまとう男の小脇に抱えられた箱の中には、石膏やパテで汚れた道具類が収まっている。男は敗北感と焦燥感に駆られた表情で、歯を食いしばって何かに耐えていると見受けられた。
「おい教授、飯は要らないんじゃなかったのか」
「要るものか夕食など！　アポリアだ、どん詰まりだ！　もういやだ、おしまいだ！」
がちゃがちゃと道具類がこすれる音を鳴らしながら歩いて、階段を降りてきた教授こと玖珂竹友（くがたけとも）という男は、ああ、とうめいて顔を下げた。階段の下まで近づいていった紅林たち三人は、突然動きを止めた玖珂を見てどうしたのだろうと様子をうかがう。
程なくして彼は顔をあげると、思いきり背筋を反らすようにして天井を見上げた。
「できあがる気がしない！　もう一歩ということは分かっている、頂上は見えている！　だがしかし！　この垂直な壁にぶち当たった気分！　やってられんわい！」
「えーと、今度はなにを作ろうとしていたんだい、教授？」
今にも後ろに逃げ出しそうな体勢をとりながらも、三月は毎度のことなので諦めて問いかけた。ぎょろりと目玉だけ動かして顔は上を向いたまま三月を見据えた玖珂は、ぎらりと犬歯を閃かせるように笑いながら叫んだ。
「そう、それだ！　いいことを聞いてくれたな三月くん。聞いてくれたまえ三月くん！　今回は球体関節を用いた製作だったわけだが

そもそもそれが持つ柔らかで女性的な屈曲運動性は表面化してしまえば従来通りの領域にしか到達し得ないと判じた俺は、関節駆動部をあえて肉の海に沈め尚且つ流動性のある液体に埋めることで瞬間的な無個性との同居を図り人形（ひとがた）の人形らしさ人を模る愚かしさをも覆い隠す可能性に着眼して製作にあたったのだ！」

「はあ」

「しかしパテと石膏で固めたモノ――あえて人形という呼称を与えてしまえば一義的な見方しか許さないことになるのであくまでもあれの呼称は？モノ？なのだが――そのモノを粘性の液体に埋める過程で肉体と粘液との境界について思い至ってしまってな！　粘液を粘液たらしめているのは人間側の認識であり、遠目に見ればそれは液体である。ならば触れることで認識を得て粘液を粘液と確たるものにし続けているこのモノを見るにあたって人は無個性の前に人間性を媒介してしまうのではないかと気付いてしまったのだ！　テーマ折れたわ！」

　またがっくりと肩を落としてうなだれる。テンションは変わらず維持されるにもかかわらず、表層的な身体動作における感情表現などは目まぐるしく変わるため、それなりに付き合いの長い紅林でも彼への対応は毎回疲れる。

　……教授などと呼ばれ白衣を身につけているため理系の人間だと誤解を招きがちだが、玖珂はおおよそ一般人には理解を得ることが難しそうな立体芸術を作り続けているアーティスト、彼の自称によるなら？物造りの雄？なのだそうである。

「いやでも、にんぎょ、じゃなかった、モノはモノじゃないんですか？」

　いつの間に取り出したのか二本目のジンジャーエールを飲んでいる律希が首をかしげてそう問うと、玖珂はまた上体を起こして今度は頭を掻いていた指で律希を指し示した。

「モノはモノ。そうその通りだ律希くん！　だが人はえてしてバイパスを通り迂回して穿った見方をすることが多い！　バイパスを通

ってバイアスがかった視点を得るのだ！　子供のように純粋にあるがまま居るがままの姿を捉えろと言ってもできるものではない。だから形が人に近ければ感情をそこに置いて移入して見てしまう可能性を考慮せねばならないっ！　つまり無個性をイメージづけられない！　どうしよう」

ぼりぼりと頭を掻いて悩み続け、玖珂は地団太踏んだ。金曜の夜という一番疲れが溜まっていて一番ゆっくりしたい時分にこうして束縛されるのは、三人にとっても苦痛のようだった。

だが玖珂はこの洋館の主でもあり、紅林たちにとっては大家のような存在である。あまり邪険にするわけにもいかず、なんとも対処に困る相手なのだ。

「セメントでも買ってきてそこに埋めちまえよ……そしたら何が埋まってるか見えないから誰も感情移入なんてしねぇだろ」

「それで伝わるか！　……いや伝わるか。普遍的で無価値と言ってもいいセメントに埋められる性質、価値観……」

ぶつぶつとなにか考え始め、顎に手を当てた体勢のまましばし固まる玖珂。次第ににやにやとした笑みを強めていき、うはっ、と腹に含んだような笑声をあげると三人に敬礼して後ろに反りかえった。

「あ、これはこれでいいな！　解決したわい。ありがとう早速作業に移る！　完成したら是非お披露目の席で紅林くんにスピーチを頼みたい！」

「……悪ぃが御免こうむる」

玖珂は自分の中で納得できる考えを手にしたらしく、憑きものが落ちたように落ち着きを取り戻すときびすを返して部屋に戻っていこうとする。なんだったのか、と三人はその背中を見て溜め息をついた。

「あの考えの下に作られた物が売れたりするんだから、不思議なもんだよな」

「ていうか師匠とかあたしとか三月さんのアドバイスで作れて、それから売れるんですから、お家賃ちょっと下げるなりなんなり感謝

を表してほしいですよね」
「どうせ大した値が付くわけではないし、そこまで望むのは酷だと思うよ」
三人はどうせ聞こえていないのをいいことに、思い思いの言葉を玖珂の背中にぶつけていく。背後の三人が何事かつぶやいていることに、気付いているのかいないのか、玖珂は上機嫌で作業場まで戻っていく。
と、その時。上機嫌すぎて前しか見えていなかったのか、玖珂が足下の白衣の裾を踏みつけて、なんの脈絡もなく転んだ。踊場のところで半回転するように尻餅をついた玖珂は、小脇に抱えていた道具箱を、階段の向こうに投げだした。
「は？」
上を見て気付いた紅林は、飛来する道具類を視認する。
石膏やパテで汚れたコテ、やすり、デザインナイフ。それらの道具類が、階段の上から紅林たちへ降り注ぐ。目測で、自分たちに当たるまでの距離は二メートルを切って――紅林は計算を開始した。
「あ」律希が間の抜けた声をあげ、三月が片腕で顔をかばう。

その間に、紅林は計算を終える。

慣れた思考の道筋が、目測から把握に至った空間の距離、認識加速により素早くはじき出された計算結果をトレースし、周囲の魔力を収束――虚空の中で焦点を合わせた位置、一〇立方センチメートルの空間を掌握――そこへ魔力を充填し、計算で導き出された術式を展開。
金属がこすれる硬質な音に似た振動が辺りを埋めた時、それすなわち飛来する物体が一定の空間に侵入した瞬間でもある。空を飛ぶそれらの動きが、一斉に遅くなった。
その隙に律希は後ろに下がり、三月と紅林も二歩横にかわした。そして一定の空間を抜けた途端に道具類の動きはまた早くなったが

すぐに下に落ち、大理石のホールに散らばった。はあ、と深い息を吐いて階段の上を睨みあげた紅林は、静かに怒気をあらわにした。
「……教授、危ねぇから白衣の裾切っとけって言ったろが」
「ん、あー、済まない！　汚れを拭ったりするのに便利だからな。長い方がいいんだこれは！」
「いやそっちの都合は知らないですよ。師匠がなんとかしてくれなかったら今頃あたし串刺しになってるとこじゃないですか」
「安心したまえ、どうせ切っ先で石膏もパテも固まってるからさほど刺さりはしないだろう！　痛い！　投げるな投げるな投げないで！　俺の相棒を傷つけるな！」
力任せに紅林からコテを投げ返され、玖珂は作業場に退散していく。やるせない顔で後姿を見送った紅林をじっと三月が見つめていて、視線に気づくと紅林は一人、ドアから表へ出た。
そして、またぎゅっと拳を握り「使わせんなよ、教授」とぼやいた。

＋

夜道。てくてくと歩く紅林はあくびを噛み殺して、ワークコートのポケットに手を入れた。林の横を通ると街灯に照らし出された白い看板の表に『まむし注意！』という看板があり、今買いに行こうとしているもののことを思い出した紅林は「まむし酒ってうまいのか」などと独り言をつぶやく。ポケットの中で、財布を転がした。
玖珂がまた作業場に引きこもった後、紅林は冷蔵庫を開けてジンジャーエールを飲もうとしたのだが、いつの間にか律希が飲み干してしまっていたために在庫を切らしていた。仕方なく買いに行こうと玄関へ向かわんとすると、ついでだからと三月に焼酎を、律希には食後のアイスを、気配を察してドアから顔だけ出した玖珂にはルートビアを買ってきてほしいと頼まれたのだった。すでに怒りは薄れていたものの、これだけはさすがの紅林も無視することとした。

それにしてもやはり、盆地のように窪みの内に内包された地形であるがゆえか、八尾の町は夜になってもまだ暑い。じとじとと袖口から入り込む湿気に紅林は辟易していた。

コートを羽織ってきてしまったことを疎ましく思いながら、緩めたシャツの襟元をぱたぱたと煽いで涼を得ようとする。むなしい努力を数分にわたって続けながら歩き、高い建物に遮られることがないために広く遠く見渡せる夜空を見る。澄んだ秋の空気が、崖の上、空の向こうにはもう漂い始めているように感じた。

蒼い月の光に照らし出される崖のシルエットは不気味な怪物のように、八尾の町を取り囲んでいる。一部崩落の危険があったところや、流通などのために切り崩された部分を除くとほとんどが六十年前のままに残された崖は、晒した岩肌をネットやコンクリート壁で覆われながらも、依然として人を見下ろし立ち尽くしている。

人の愚かさが生んだ地脈断層大地を、見下ろしている。

「考え過ぎか」

またあくびを噛み殺して、紅林は歩く。田舎であるがゆえか、商店街唯一のコンビニエンスストアも九時には閉店するため、急がなくてはならなかった。

そして急いで、速足で動いたために、紅林は出会った。

研究所へ向かう際にも毎度通る石橋に差し掛かり、あぜ道に入る紅林が田畑の脇道をなんとはなしに見やる。すると、育ち盛りの野菜が蔓を巻きつける支柱やネットの向こう側、闇の中に、ぼんやりと大きな輪郭が見えた。

「ん？」

見慣れないもののような気がして、畑を回りこんでのぞく。

そこにあったのは黒いワゴン車で、スモークガラス越しに見ゆる車内灯で、中でうごめく数人の陰が映し出されていた。……すわ泥棒か、不法投棄か。紅林が成り行きを静観していると、道の奥からスーツに身を固め闇にまぎれた男が二人、現れる。ワゴン車に近付く二人に反応してか、スライド式のドアが開いた。

よくよく見れば男たち二人の間には少女が一人、手足を雁字搦めにされて猿ぐつわをかけられた状態で運ばれている。つまり泥棒でも、不法投棄でもなさそうだった。

「……未成年者略取の現行犯」

さてどうしたものかと頭をひねり、ポケットに手を入れるが携帯電話は家に忘れてきていた。ちょっとの外出だと思って油断した自分の不手際を嘆き、手持ちの道具を確かめる。

折り畳み式の財布。家の鍵束。いつか行った時の病院の領収証。あとは着ている服くらい。役に立ちそうなものはあまりない。

助けを呼びに行こうかと来た道を振り返るが、ばんばんと車のボディを蹴飛ばして車に押し込められないようにしている少女を見るに、そのような時間的余裕はまったくない。なんと言っても八尾町は田舎である、隣家は字面通りの意味を持たない。見回しても、自分以外の人はいない。いや、いても助けてくれるかどうか。

結局、この場で動くべき人間は紅林のようだった。逡巡すること一秒未満、彼はポケットに手を入れ、はあと一息、仕方なく覚悟を決める。

鍵束を左手に納め、指の間から先端が出るように握りこむ。たったこれだけの工夫でも、殴った際の殺傷力は飛躍的に上昇する。ついでに手頃な石ころを右手でつかむ。準備ができたので、暴れて車に乗せられないようにしている少女から視線をずらすと、ワゴン車の後部ガラスに向かって振りかぶった。

間をおかず破砕音。蜘蛛の巣状にびしりとヒビが入ったガラスはそれなりに大きな音を立てて、車周りにいた人間に威嚇の効果を与えた。

その隙を見逃さず低い姿勢のまま詰め寄った紅林は、踏み切った左足を軸に繰り出した右の前蹴りで少女誘拐犯の一人の急所を蹴り潰した。続けて地面に落として踏み込んだ右足に重心が移動した途端に、殴ろうと振りかぶるもう一人の男の左肩を右掌で殴って初動を制し、鍵束を握る左拳を顔面に叩き込んだ。

二人の男はほぼ同時にワゴン車にもたれかかってずるずると地面に落ち、どちらもが血となにかその他の液体の混ざり物で、じわじわと土を湿らせた。
「おいなんだ」「邪魔が入ったか」
スモークガラス越しに外で起こった異変に気付いたワゴン車の乗員たち四人は、少女を脇に抱えて逃げようとしていた紅林の退路を断つべく道の両側を塞ぐ。畑側はネットやビニールハウスで通りにくくなっているため、一人ならばともかくも、身動きとれない少女を抱えて逃げるのは少々難しそうだった。
「なんだお前は」
低い声で脅しをかけるようにスーツの男の一人に問われ、逃げ切れそうにないと判じた紅林は少女を地面に寝かせると、またポケットから鍵束を取り出して半身になり、左右を塞ぐ男たちのどちらから襲われても良いように構えを取ってから答える。
「通りすがりの善良な一般市民ですが、なにか」
「……一般人か？　本当に？　ならば少しばかり手荒なことをしていたように見えても、仕方がないな……だが我々は事情あってこの子を運んでいる最中だ」
紅林の身なりや発言から何かを読み取ったのか。男は臨戦体勢を少しだけ崩し、説得、あるいは懐柔に移ろうとしたようだった。どうやら眼鏡をかけたその男がこのグループのリーダー格であるらしく、話し合いに移行した途端に残り三人が殺気を消して、構えを解いている。
「事情ってなんだ」
「守秘義務に関わるので話せない。これで信じろというのは難しいかもしれないが、なんなら我々と同行してもらって警察へ向かおうか。身の潔白を証明することはできる」
「いや、拳銃携帯してる人にそう言われても……警察行ったら捕まるだろ、フツー」
見透かしたような指摘に、男が言葉に詰まった。紅林は先ほどの

男の左肩を殴った際に掌に硬い感触を感じたためにカマをかける意味合いで言ったのだが、反応を見るところ今左右を塞ぐ四人も拳銃は持っているらしい。やはり、という確信と共に、紅林は内心冷や汗を流す。当たれば死ぬ武器を相手取るのは、ひさびさなのだ。

「あんたらが、拳銃の事情まで話せるなら警察行ってもいいが。どうするよ」

「……どうしても穏便にことを済ませることができないらしいな」

「誘拐犯に言われたくねぇよ」

「だから違うと――まあ、一般人からすれば、その言葉も当然か。先に謝罪しておこう、悪く思うな。今日この場で起こったことをきみが誰に話そうと公に信じられることはなく、今から負う怪我について責任を問われる者は誰もいない」

「じゃあんたら誰だよ」

答はなく、眼鏡の男が無造作に踏み出してくる。どうやらすぐさま拳銃で一斉射撃ということはないらしく、その点だけでも紅林はほっとしていた。少なくとも徒手格闘に限定すれば、勝機は十分にある。紅林も三歩の間を詰め、眼鏡の男と正対した。

間合いに身を投じるか否かの境目で、眼鏡の男が息を吐き鋭い左の拳を打ちこんでくる。頭を振ってかわした紅林は、お返しにと自分の左、鍵束を握って殺傷力をあげた拳を打ちこもうと構えを取るが、これは正面の眼鏡の男を引きつけるためのフェイントである。

足音、及びに先ほど目視で捉えた背後の敵との距離感を元にして拍子を刻んだ紅林は、ここと直感した位置で前の足に移した重心を後ろに入れ替え、軽く曲げていた右肘をそのままに後ろへ突き込む。迫っていた男の左手が、紅林の攻撃で弾かれた。

奇襲に驚いて攻めあぐねた背後の男に向けて続けざまに左ストレート、右フックと連続して叩き込み、特に右フックが肋骨に喰らいついた感触を得たところで紅林は勢いをつけて反転、変則の左後ろ回し蹴りで斜め上から相手の左膝の少し下を踏み砕き、勢いをつけてまたも背後へ跳躍した。

「うぐっ！」
今度こそと背後から迫っていた眼鏡の男の挙動を読んでいるかのように、空中から横蹴りで右足刀を下腹部に食い込ませ、バランスを崩して倒れたところで胸を左足で踏みつける。淀みない連携の前に唾液と胃液を吐き散らして眼鏡の男は気絶し、早くも残りは二人となった。
「止まれ！」
と、ここでとうとう拳銃が抜かれようとしていた。前方と後方、どちらも射撃体勢に入ろうとしている。だが――――抜かれる前に紅林の計算が始まっている。

目測から把握に至った距離で彼我の間合いを捕捉。
認識加速により算出した結果をトレースし周囲の魔力を拡散。
虚空の中で焦点を合わせた四立方メートルの空間を掌握。
空間へ魔力を充填し計算で導き出された術式を展開。

ぎちり。軋みをあげた空間は、紅林の前に道を開く。
たった一歩、眼鏡の男を踏みつけた時の身を屈めた姿勢のまま踏み出しただけに見えた紅林は――ゼロコンマ一秒の時間も要さず、四メートルの距離を文字通り滑るように、身体の動きを止めたままに地面だけ動いているように、拳銃を構えた男の真横へ移動していた。
移動を終える時、男が構えていた拳銃のスライド部分をつかみ、押し込んでもぎ取る。分解された拳銃を成す術もなく握り、祈るように構えていた男が最後に見たのは、鳩尾に突き込まれる自分の拳銃のパーツだった。
「あ、あああああ！！」「うわ」
背後の一人に話しかけようとした紅林だが、恐怖のあまりか、最後の一人たる男は話を聞くことも無く叫んで引き金を引いた。火を吹く銃口から放たれ唸りをあげて飛ぶ二発の弾丸は、目を丸くした

紅林の眼前の空間に吸いこまれていく。
「……っぶねーな、突然に撃つなよ仲間に当たるぞ」
ところが狙い定めたはずの銃弾が、紅林に当たることはなかった。男は己の目を疑っているようで、動きが止まっている。撃たれた紅林としてもかなり素早く、精密な動作だったと称賛できる射撃だったので、撃った本人が自分の手ごたえと現実の差に驚いているのも仕方ないだろうと思った。
「っ！」
そこで今度こそとばかりに、男は再度指先をトリガーガードから移動させる。焦りと困惑が浮かぶ表情をちらつかせたが、引き金に指をかけた途端にそれら負の感情はなりをひそめる。相当な練習に裏打ちされたと見える、一秒とかからない心構えの変化が垣間見えた。
もっとも、その時には。構えようとした右手に、真横に高速移動してきた紅林の右手刀が振り下ろされ、続けざまに喉に貫手がめりこんでいたわけなのだが。
「遅ぇよ。……で、これで、ちょうど、だな」
ぼそりとささやき、紅林は手を打ち払う。
全て片付いたと、倒れ伏した六人の男を見やって、その間に倒れていた少女に近寄る。両手両足を縛るロープと口を塞ぐ猿ぐつわを見て、解くのは厄介そうだと思い眼鏡の男の懐などを漁る。案の定、ポケットナイフが出てきたのでそれを使って緊縛を断ち切り、改めて正面から少女を見つめた。
背丈からして年の頃は十二、三歳だろうか。前髪が長いのであまり窺えない表情は、まだあどけなさが残る印象を与える。やや低めのツーサイドアップに結った髪型も似合ってはいるのだが、これまたかわいらしいというか、幼く見えるというか。
「大丈夫か？」
「あ……」
警戒したのか、地面にお尻をつけたまま後ずさりして紅林からも

距離を取る少女。少し傷ついたが、紅林としても六人がかりで誘拐する必要があったほどの少女がなにも危険なものを持っていないと断定できるわけではなかったので、距離を取られたことに警戒を強める。

だが古ぼけたデザインのTシャツとショートパンツ、あとは素足にサイズの合っていない大きなスニーカーを履いているだけの少女は、またなにか危害を加えられるとでも思っているのか、そわそわと前髪を撫でつけたり靴の具合を確かめながら、いつでも逃げられる体勢をとろうとしているだけとも思われた。拍子抜けして、紅林は告げる。

「安心しろ、なにもしねぇよ。帰れるならさっさと家に帰って、もう誘拐されないように気をつけて生活するんだな」

先に立ちあがって腕時計で時間を確かめた紅林は、九時で閉まるコンビニエンスストアに向けて小走りで行くべきだろうか、と思案する。すると砂利を踏みしめて立ち上がる音がして、少女がこちらを向いていた。

「なんだ？　まだなにか……ん？　そういや」

じっと見据えていると、少女が慌てた様子で後ろ手を組んで退き、やはり逃げ出そうとしているなあと紅林はしみじみ実感し、きっとひどい目に遭ったのだろうと同情する。

「そういや、この辺で見ない顔だな。ここは狭い町で小中学校しかねぇし、俺も大体の顔ぶれは覚えてるんだが……遠くから連れて来られたとかか？　なんなら交番までは案内するが」

どうだ、と提案すると少女は動きを止め、警察、と反芻するかのようにつぶやくと、首を横に振って、紅林が進もうとしていたのとは反対の方向に向かってじりじりと移動する。

「警察、ダメだから」

「ダメって。んなこと言われたらどうしようも、」

「ねえ」

言葉を遮って、少女はつぶやく。

紅林が顔をあげると、なんらかの意を決した面持ちで、真っ向から紅林を睨みつけていた。
その表情は歳に似合わず、どこか色づき始めた強い力を伴っていて、紅林は気圧される。

「――結局、この程度のことしかできないの？」

弾劾する語調で静かに言いきった少女は、呆気にとられてその場に縫いつけられる紅林を尻目に、くるっと身体を反転させると駆けだした。
あとに取り残された紅林が追いかけよう、という意志を肉体に反映させることができるようになった時には少女の姿は闇に掻き消えたあとで……戸惑いを隠しきれない紅林は。とりあえず、当初の目的だったコンビニエンスストアへの買いだしを済ませようと、走り出す。
この程度、が何を指しているのか、それ知ることだけに思いを囚われそうになったが。
そうも固執する理由がないと己を納得させて、諦めた。

1　雑用研究員は溜め息をつく（後書き）

というわけで異能力バトルものいよいよ開幕。

2　迷う少女は彼を頼る（前書き）

偽術設定は適当に読み流してください

2　迷う少女は彼を頼る

……と思いきや再会の時は意外なほど早く訪れた。
八尾はかなりの田舎町であり、夜八時を過ぎるとほとんどの店が一斉に明かりを落とす。もちろん、スナックや呑み屋などはむしろこの時間帯からが営業時間と言えたが、いくら明かりが点っていてもそれらの店は少女が近付く場ではないはずだ。
「……よう」
となると必然、誘蛾灯の働きを見せたコンビニの前には、少女が膝を抱えて座り込んでいた。買いだしを済ませて入口から出てきた紅林が片手をあげて声をかけると、少女はびっくりした顔でのけぞる。また逃げられるかと思った紅林はその場で立ち止まり近付かないようにすると、用件だけを口早に伝えた。
「あのな、別にここに留まるのは勝手だがな、もうじき閉店時間だぞ」
「え。うそ、閉まっちゃうの？」
心底驚いた様子でぽかんと口を開けたまま固まった少女は、明るい光の下で改めて観察すると薄汚れた身なりで、服装の簡素さといい何も荷物を持っていないことといい、紅林の目にはどうにも怪しく映る。
じっと見ていると、その紅林の視線に気づいたのか、慌てて口を閉じてそっぽを向く。
「ひょっとして、家出か」
目線が逸らされたのをいいことに、紅林は率直に問いかけた。少女は特に目立った反応は見せず、通りの向こうを見据えたままにちがう、と弱弱しくつぶやいた。
「だが警察には頼れねぇんだろ」
「そうだけど」

「なんで頼れないんだ」
「追いかけられるから」
「なに。じゃあさっきの連中、まさか警察だったのか？」
「ちがうよ。あいつらは、また別の奴」
「なんなんだ」
「よくわかんない……」
肝心の情報については黙りこんでしまい、紅林はどうしようもないな、と思い始める。そこで店主が表に出てきてシャッターを下ろし始めた。少女の方を見た店主は見慣れない顔に首をかしげたようだったが、紅林が話しこんでいるので知り合いなのだろうと判じたのか、そのまま店の中に引っ込んだ。通りは街灯と民家から漏れる明かりのみの、薄暗い世界となる。
「というか、お前ここの住人じゃねぇんだよな」
「そうだよ」
問いかけに答が得られた瞬間、紅林は目を凝らして少女を見る。
その周囲の空間を調べるべく――魔力を瞳に集めた。
「……どうやってここに入ってきたんだ？　大竜事変からこっち、地脈断層大地の出入りに際しては……入場者の周囲空間にパスをつけるようになってるはずだ」
ところが正面に回り込み睨むように少女の身体の周りを見る紅林が？把握？に至っても、なにも感知することはできなかった。紅林がなにをしているのかわかっていない様子の少女は、不審な人物を見るような目つきになった。
「なに、大竜事変って」
「はあ？　いやおい、冗談だろ。五年前、この大竜地脈周辺で起こったアレだぞ。知らないってのか」
「わかんない」
「ホントかよ。日本の裏側に居たって、ニュースは届いたはずだぜ……ここの下にもある大竜地脈、その魔力量が大幅に減少したせいで八時間にわたって、関東と東海の？偽術（ぎじゅつ）？と偽術を使ってる機械

類が使えなくなった、ってな大事件だぞ。つい最近まで砂漠のど真ん中に居たとかでなけりゃ、絶対知ってるはず」
「わかんないよ」
不安そうに眉根をひそめた表情を見せて、少女は紅林の言葉に耳を塞ごうとする。反応を見るに少女は本当に何も知らないようで、嘘をついているようにも思えなかった。
だがあの時、首都圏における偽術運用のストップでもたらされた被害は甚大なもので、その後半年にわたって日本は産業と経済の至るところにダメージを引きずったものなのだ。国内に居たのなら知らないはずはない、と紅林は断ずることができる。
しかも不思議なことに、この少女はパスも無しにここまで乗りこんできている……と、再度？把握？により少女の周囲空間になにか術式の痕跡がないか探るが、しかし不審な点はひとつも見つからない。それでも目を凝らしてその作業を続け、その傍ら少女に再び尋ねる。
「話を戻すが、どうやってお前ここに入ってきたんだよ」
「……斜面を下りてきた」
「斜面ってお前、アレほとんどただの岩肌じゃねぇか」
「逃げてたから。険しい道の方が撒きやすい」
「ありえねぇ……どっから逃げてきたんだよ」
「南の方。詳しくは、覚えてない」
語りたくないだけじゃないのか、と紅林は疑ったが、問いただしたところで真実を語るとも思えない。また「わかんない」と返ってくるだけのような気がした。
先ほどは明らかに誘拐事件としか思えない状況だった上に相手が拳銃まで所持していたためにとりあえず助けてしまったのだが、冷静に話を聞いてみると少女には不審な点が多かった。それに、そもそも紅林はこんなところで油を売っていないで、少女が無許可侵入者だとわかった時点で地脈断層大地への出入りを司る環境管理局に一報入れなくてはならない立場なのだ。

彼はこの地の研究所で働く？地方偽術師？なのだから。
「ねえ、じろじろ見るの、やめて」
「ん、ああ、悪い」
「？空間把握？したってどうせなにも見つかんないよ」
ぎくりとして、紅林は距離をとった。その対応の意図するところがわからなかったのか、少女はまた眉をひそめ、目を細めた。細められた鮮やかな茶の瞳に、魔力が集まるのを紅林の目が？把握？した。途端に紅林は臨戦態勢に入り、語気と警戒を強めて確認を取る。
「お前、偽術師か」
「そっちが先に空間把握してきたのに、なんでこっちがやり返しただけでそんな反応するの？　わけわかんない」
少女は不思議そうに言うが、紅林の方は冷や汗が背筋を伝っている。警察に追われ、よくわからない連中に追われる少女の正体に、思い当たるところがあったからだ。
「……ここの偽術・地脈魔力研究の成果を盗みにきた、産業スパイかなんかだな」
「は、え？」
「でなきゃ追われたりしねぇだろ。ってことはさっきの連中も環境管理局の奴か？　蹴り飛ばしたりして悪いことしたな」
半身になって構えながら、じりじりと間合いを測る紅林。いきなり態度を変えられ、状況の変化についていけない様子の少女は、目を白黒させて後ずさりした。
「ま、待ってよ。わたし、スパイなんかじゃ」
「じゃあここに来た目的なり理由なり話していけよ」
「それは」
「言い淀んだな。とりあえず捕まえて環境管理局に突き出す」
「いやっ、そのっ、ちょっと、待ってってば。だいたい、あなたほとんど魔力からっぽじゃない。捕まえるなんて、無理でしょ」
今度は紅林の方が言い淀む番だった。
そうなのだ。先ほどの戦闘の際に、紅林は魔力をほとんど使い切

ってしまっていた。現在かろうじて使える術式は周囲の魔力と術式の動きを察知するこの？空間把握？のみで、まともに大捕り物を行えるほどの余分な魔力は存在していない。凄んではみたが、既に紅林は窮地に立たされている。

「まさか」

思い返してみれば、先ほど少女が「結局この程度のことしかできないの」と言ったのも魔力量から紅林の戦力を見切った上での発言と考えられる。驚き慌て、紅林はよくよく少女の周囲空間の魔力把握に努めてみて、さらに愕然とすることを強いられた。

出入り許可のパスである術式を探すことに執心していたせいもあるが、それ以上に――巨大にして圧倒的すぎる魔力の奔流に己が呑み込まれかけていて、それ故に魔力量を感知することができていなかったことを知ったのだ。

紅林が先ほどの戦闘で使い切ってしまった量など、プールの水のようになみなみと湛えられたこの魔力量に比べればせいぜい、バケツの一杯といったところだ。膨大で莫大な流れは、常人に扱いきれる量を遥かに凌駕していた。

「一体、お前」

「ちょっと。ちょっと！　だから構えないでよ。別に戦う気なんてないし、もちろんスパイなんかでもないんだから！」

唖然としつつも臨戦態勢は解かなかった紅林へ、少女は両手を突き出して抵抗しないとの意志表示をした。これほどの力を持ちながらなにを下手に出る必要があるのか、と紅林は訝しむ目線を向けたが、少女はあくまで真剣に、嫌疑を否定しようとしているだけと見える。

「じゃあ、なんでここに無許可で侵入したんだ」

「……わかんない」

「気が付いたら居たってのか？　さっき自分で崖を下りてきたって言ったろが」

「ちがう。なんでここに、とか、どこから来た、とか、五年前の、

とか。全部、ぜんぜんわかんないの」
「ああ？」
「たぶん、記憶喪失なの、わたし」
自分で自分を指差して、言った。その動作にすら疑いの目を向ける紅林だが、彼女は紅林以上に己のことを疑うような目つきで、うつむいた。
「だからなんでさっきの奴らに追われてるのかもわかんない。警察は……頼ったら、さっきの奴らが来て、『お迎えだ』って言われたんだよ。警察もグル。だから警察はダメ」
しきりに首を横に振り、警察はダメだと繰り返す。記憶喪失と言われてしまうと、先ほど大竜事変のことを知らなかったのもまあ納得できるようにはなってくるのだが。もちろん、少女が演技をしているだけで、やはりスパイであるという可能性も無くは無い。
「記憶、全部ないのか？」
「小さい頃のことはわかる。でも、ここ数年分が、ぽっかり」
「……なら、五年前の大竜事変のあとに地脈断層大地への出入りに規制がかかったのも知らねぇわけか。というか、お前も空間把握できるってことは、偽術師なんだよな」
「うん。少なくとも残ってる記憶の中でも、使えてる」
「その背格好で五年以上も前っていうと、残ってる記憶は七、八歳の頃だろ……そんな歳であの？理論？を理解できるのか？　お前、外見老けにくいだけじゃねぇのか」
「そっちだって結構若そうじゃない。お互い様だよ」
「俺は十八だ」
「うそ？　中学生くらいだと思った」
ぐ、と喉元に痰がからんだような息の詰まらせ方をした紅林だが、目の前の少女は見た目通りの年齢だとすれば外見的特徴で貶せる部分がほとんど存在しなかった。言われるがまま言い返すことのできない紅林は、続けて問うことで話題を逸らした。
「とにかく、少なくとも五年間の記憶がないんだろ。だったら四年

前に知覚空間限界距離の証明を発表した宮下恭二と佐野潔史って偽術師も知らないのか」
「へ？　……ええっと、佐野潔史は知らないけど」
「そうか」
「けど」
「ん？」
「あー、んとね。宮下恭二って、空間把握における範囲内物体の魔力励起発生と終束の方程式とか研究してなかったっけ？　それともこの数年で終了して、他の研究に移ったの？」
「……いや……それで、合ってる」
　きょとんとした顔で紅林を見る少女に、ぎこちなくうなずきを返す。
　空間把握を使える偽術師ならば知っているべきこと、五年以上の記憶が無くとも偽術師ならスルーしてはならないこと。その二つを調べるための問いかけであったが、少女の答は完璧だった。宮下は空間把握研究により世間に名を知らしめた偽術師であり、また彼は少女の述べた研究を七年前から開始して「予想では終了まで数年かかる」との考えを表明していたため他の研究をする暇などないと予想できるからだ。紅林の言った研究は、佐野潔史個人の物である。
　もちろん、これも研究について相当勉強を積んでいるのであれば答えられない問いでもないのだが……知ってるふりを見破るのは容易いが、知らないふりを見破るのは難しい。現段階ではこれ以上に打つ手がないため、疑いつつも突き出す以外の対処を採ろうかと考え始める。
「それでお前、空間把握以外の術式は使えないのか」
「少なくとも今は」
「ならその魔力量は、なんだよ」
「生まれつき……っていうのは無理あるよね、やっぱ。わたし？バレッジ？持ってるの」
　自らの脇腹をさすって、少女は苦笑いを浮かべた。紅林はその単

語と少女の所作に目を見開き、今日は驚いてばかりの自分に心中で呆れ笑いしか出て来ない。
「少なくとも五年以上前、ＡＣＯに居たのは、確実なのかな」
紅林にとって懐かしき場、その後輩との巡り合わせに、彼は心中で口が裂けるほど笑んだ。

＋

偽術師という語が生まれたのは六十年前の大戦の後である。だがその以前、大戦が起こるまでの世界においては？魔術？と呼ばれる技術が存在していた。
八十年前、一般相対性理論、量子力学といった時間、空間、粒子などを取り扱うこれら学問の考えを基軸としてさまざまな理論がこの世に生まれた。中でも発達したループ量子重力理論を元にして空間・重力・物質の表現法を知り、生物と世界との間を漂う？負の質量を持つ粒子（エキゾチックマター）？通称を魔力というその存在を、人類は計算で導き出すことに成功した。そしてその粒子が持つ『対消滅時にエネルギーを発して空間に奇怪な歪みを与える』という性質を利用することで、一定の時間と空間を操る能力を手に入れた。
その能力を特異性時空間展開術式、通称として？魔術？と呼んだのだ。魔術は様々な技術と結合し、人々の生活を豊かにし――当然のごとく、案の定、人の世を滅ぼしかけた。
これまでの兵器の概念を覆す時空操作能力は、大戦においてかつてないほどの死傷者を出す悪魔の道具と化した。世界人口は二割ほど減少し、いくつかの小国も消えた。さらに、勝利国でさえも大きな被害に見舞われた。なぜか。
大地が形を結んだ遥か昔に埋もれて、今回の大戦で引き上げられ莫大な量が消費された魔力粒子。それが溜まっていた大陸プレートの上層部に位置する空間が、魔力の支えを失って沈んだためだ。これに連動して地表も沈み、かくして魔力溜まり――？地脈？が比較

的浅くに存在した地点は深くへこむこととなった。
さながら、巨人が足跡を残したように。それらの場が地脈断層大地と呼ばれ、魔力粒子の薄くなった世界においてそこだけが研究に足るだけの量を保有する場となった。当然、研究施設はそこを中心におかれることとなる。
そうしてかつての？魔術？のように大規模に時空を操れるほどの魔力量は存在しなくなり、また魔術を操る方法論を記した書物も、方法論を知る術師も戦火で失われた。
以後、産業などへ安全に利用するため地脈研究が開始され、理論立てて作られた技術には人類の自戒の意味を込めて『偽物の魔術』として？偽術？の呼称がついた。また主要な研究の場として？ＡＣＯ？という、現在でも国家資格としての偽術師養成などを行っている機関が設立され、偽術は魔術の代替品として深く広く浸透することとなった。

「で、お前はどうしたいんだ」
「なんていうか、わかんない」
「またそれかよ」
「だって、気が付いたら森の中で、追っ手がいて、捕まりたいとは思えなかったから、逃げるしかなくて。自分がなんのために森に居たのかも、わかんないんだよ」
困り果てた顔で少女はうつむき加減に横を歩くが、紅林はなんとなく、少女が追われていた事情などもある程度把握し始めていた。偽術師で、バレッジ保有者。それだけで十分、紅林には思い当たるところがあったのだ。もちろん伝えたところで仕方がないので黙っていたが、それと同時に彼は、環境管理局に秘匿することで自分にメリットがあるかを考え始めていた。
無許可侵入者の隠匿がバレた際のデメリットと天秤にかけ、利益があるかを考える。するとわずかながら匿う方にメリットがあると

思われた。もしもスパイであるなら見張ることで逆に利用できる部分もあるかもしれないし、そうでなくともバレッジ保有者は貴重な人材である。……自らの目的のために、大いに貢献してもらえる。

よって紅林は針路を自宅の方へ取り、特にあてもなくコンビニの前から離れるだけの道のりを外れる。行くあてもない少女はわりと、すんなりついてきた。こいつ誘拐するの簡単そうだな、と紅林はちょっと心配した。

「うちに来るか？」

「え」

けれど心配することと自分が選ぶ行動の目的とは、また個別に切り離して考えていた。簡素に素っ気なくさりげなく。提案の詳細を語り、彼女の行き場を定めようと目論む。

「俺の上司と知人と大家も住んでる奇妙な洋館だがな。一人くらい泊まれるスペースはあるし、警察と仲の良い模範的な一般市民もいねぇし。しばらく隠れる分にはちょうどいいと思う」

「でも」

「ああ、ちなみに上司と知人は性別区分では女性だ。そんで俺と大家は女に飢えたりかまけたりする暇のある人間じゃねぇから、身の安全も保証してやれるぞ」

「そういう言い方って。ていうか、そういう問題じゃなくて……」

「なんだ、なら金の心配でもしてるのか？　何年も住むってならともかく、一時的に滞在するくらい気にすんな」

「いや、そこも心配はしたけど、そんだけじゃなくて」

首をかしげる紅林の隣で足を止めて、少女の手が袖をつかんで引きとめ、すぐに手放す。自分で行ったことだというのにひどく寂しげな顔で突き放した彼女は、自分より一回り大きな紅林の手を見ていた。

「そこまでしてもらう理由なんて、ないでしょ」

「でも現時点で持ってる記憶の中で、頼れる人間のあてはないんだろ」

「そりゃ、そうだよ」
「じゃ、いいだろ。たまたま俺が助けられる時だったから助けといてやる。満足するまで隠れてきゃいい」
　言い切った紅林の方を見上げる、そんな少女に目を逸らさず彼も応じる。ころころと鈴虫が音色を立てるあぜ道の中途、向きあった二人の間の距離を、おずおずと少女の方から詰める。
「本当にいいの？　なんで？」
「急に疑り深くなったな。まあいい、それくらいの方が普通だ。ただなんだ、理由か。……理由な……アレだ、俺に助けてられるだけの余裕があって、かつこのまま放っといてお前がまた攫われそうになったりすると、寝覚めが悪ぃからじゃねぇかな」
　うん、と一人納得する紅林の前で、少女は一瞬呆気にとられたが、その後は曖昧で薄く陰った表情を浮かべて「そんなことあるわけないでしょ？」と囁いた。思考の半分では利益不利益を考えていただけにその言葉でぎくりとするところのある紅林であったが、気まずさを感じると言い負かされそうに思ったので即座に言い返す。
「あるんだから、仕方ねぇだろう」
　言い訳じみているというか、すねたような物言いの返答だった。否定の意を込めて訊き返した少女でさえ、思わず噴き出してしまうようなセリフだった。自分でも妙なセリフだという感触がじわじわと湧きあがってきたのか、紅林は結局気まずそうな顔になった。
　けれどひとしきり笑ったあとで、少女は紅林へ向き直って頭を下げた。いろいろと彼女にも思うところはあったのだろうが、このまま一人で逃げたり隠れたりすることに対しての心細さが大きかったのだろうと紅林は思った。
「じゃあ……少しの間だけ、お願いします」
「おう。俺は紅林吾朗」
「わたしは、わた……」
「綿？」
「……渡良瀬（わたらせ）。渡良瀬、まほら」

ほんのわずかに迷ってから名乗ったまほらは、歩き出した紅林の後ろにつく。

帰路につく紅林は、さて同居人の三名にはどのように話すべきか、とうまい説明を考え始めていた。

2　迷う少女は彼を頼る（後書き）

偽術＝空間になんやかんや性質を加える能力

だと思っておけばいいと思います

3　自称芸術家の許諾と雑談

「ずいぶん遅かったね吾朗。酔いがさめてしまったよ」
「師匠、あたしの、あたしのアイスはー」
「あ、悪い。だいぶうろうろしてたから溶けてるかも」
「ししょぉのばかー！」
紅林が投げだしたビニール袋に納められたアイスクリームに慌てて飛び付いた律希は、わなわなと両腕を震わせながら急いで冷凍庫にしまいにいった。三月に焼酎の酒瓶を渡しながら靴を脱ぐ紅林は、呆れたように台所の方を見る。
「あいつ自分で買いに行った方が絶対早いだろ。あんだけ健脚なら」
「食後に弟子を走らせるつもりだなんて、本当にあんたは人にものを教えるに向かないね」
「うるせえ俺だってやりたくてやってんじゃねぇ」
「私の使い走りのことかな？」
「師匠と弟子って奴だよ」
「聞き捨てならないですよ師匠！　罰として明日の稽古は普段の倍付き合ってくださいね！」
「倍もこなしたらお前にとっての罰みたいになると思うがいいのかよ？」
「ならばお手柔らかにお願いします！」
「……稽古にならねぇってそれ。あー、あとな、二人にちょっと話があるんだが」
大理石の敷き詰められたホールに上がり込む紅林が呼びかけると、台所からスプーンをくわえて顔だけのぞかせた律希と焼酎の酒瓶を開封しようとしていた三月は、同時に首をかしげた。
「あんたがそういうこと言う時は、大抵なにかまずいことがあった時だよ。今回はなんだい」

「まずいことってわけじゃねぇんだが、まあちょっとな。おい、入れよ渡良瀬」
後ろのドアの方へ声をかけると、ドアが申し訳程度にちょこんと開き、こそこそおずおずとうつむいたまほらが室内へ姿を現した。その人影が少女であることを認識した瞬間、三月は酒瓶を取り落としそうになり、律希の口からはスプーンが落ちた。
「あの、えっと、渡良瀬、まほらといいます」
顔をあげたまほらは一番近くにいた三月と目が合うと瞬時に下を向き、気まずそうその後目を合わせないようにしている。三月はものすごく嫌なものを見たような顔をしていたのでそのせいだろうと紅林は思ったが、次の一秒の間にその顔は紅林の方を向いた。律希の方を見ると、落としたスプーンに手を伸ばしながら三月と同じような表情を浮かべている。
「な、なんだよ二人して」
「いや、だって吾朗、夜道でなにを拾ってきたかと思えばまさか女の子だなどとは、さすがの私でも想像さえしていなかったよ……しかも見ない顔だと思ったら、パスも持っていない」
無許可侵入者であることについて言及する言葉が三月の口から飛び出したせいか、縮こまって紅林の後ろへ隠れるまほら。早くもパスを不携帯であることについて看破されてしまい、紅林もどう説明したものか迷う。
彼の上司である三月も当然ながら研究所で働く偽術師の一人であり、所員はすべからく空間把握を使える。よって見抜かれるだろうとは予想していたのだが、こうも早いとは思っていなかった。
「私はあんたと違って町の人の顔くらいはしっかりと覚えているんだよ」
「表情から考えを読むなよ、ったく。そうだよこいつは無許可侵入者だよ」
「ならどうして」
「ちょっと耳貸せ。……あのな、も一度こいつのこと空間把握して、

魔力量を確かめてみろ」
　三月は唐突な命令に怪訝な顔をしたが、紅林に言われるまま再度魔力を瞳に集め、まほらの周囲空間を把握した。すると怪訝な顔が慄きの色に染められ、訝しむ目線は一段階レベルをあげて警戒の域に達した。うつむいているためその反応もわからないまほらは、どうすればいいのかとその場で立ちすくんでいる。
「これ……この子、バレッジ持ち？　だとしてもこんな化け物じみた量、普通の偽術師ならまずありえないよ」
「だがここに有り得てる。チャンスだと思わねぇのか、三月」
「なにがだよばか。むしろピンチだろう、吾朗。パスなしの偽術師といったら相手は偽術研究のスパイと相場が決まっている。しかもこの尋常ならざる魔力量、私とあんたでかかっても倒されかねない危険度じゃないか」
「それがだな、こいつ自分が何をするために動いてたのか、さっぱり覚えてないらしい。ここ数年の記憶が抜けてて、どうすればいいのかもわからず悩んでるんだと」
「そ、その訴えを鵜呑みにしたというのかい？　ああ、なんて愚かな」
「馬鹿言え、ひっかけクイズで多少は試したわ。だが面識の無い奴の記憶喪失なんざフリなのかマジなのかわかるわけねぇだろ」
「だったらなおさら早く環境管理局へ通達を」
「駄目だ」
　自分を押しのけて前へ進もうとした三月を押し留め、紅林は肩をつかんで引き剥がすと三月の目に真っ向から対峙した。爛々とした輝きが宿るその目に気圧されて、三月が一歩紅林から遠ざかる。
「言ったろ？　これはチャンスだ。記憶喪失がホントかウソかはわからねぇが、環境管理局やＡＣＯに追われてるのは事実だ。そんで寄る辺も無い中で、たまたま俺を利用できると判断してる。なら記憶喪失で俺たちを頼るしかない身の上……まあ演技かそうでないかはともかく、俺たちにはそう見せるだろう人格。それをこっちも利

用させてもらえばいい」
「……バレッジ持ちが希少なことは私もわかっているよ。けれど、記憶喪失がフリだったとして、途中でそれを露呈させた場合は？」
「露呈させるって時は俺たちに牙を剥くってこったろ。勝てる算段と生き残れる策は立てとく。そんで責任追及がきたら、あの魔力量による圧倒的な力で脅されてたとでも言えばいい。最悪の場合でもお前は助かるだろ、ここの研究所は成果も多くあがってるわけだしな」「でも吾朗」「俺は？一国？で立場が守られてるお前とはちがうんだよ。リスク負わなきゃ成りあがれない」
　歯噛みして、紅林はうつむく。自分の弱みを旧友に晒してしまったことに、少なからず羞恥心を抱いたのだった。そのセリフを引き出すまでに追い込んでしまった三月の方としても気まずい空気を感じてしまい、沈黙の内に時が過ぎる。しかし、
「うわーなんですかこの子、師匠の隠し子ですかいや似てないですねでもかわいい！」
　話し合いを横合いから踏みつぶすように、律希の大声がホールに響き渡った。唖然としつつ二人が見やると、律希に頭を撫でられてしどろもどろになっているまほらがそこにいた。
「えっ、いや、その、あっ」
「あたしは律希といいますよ。お嬢ちゃんのお名前はなんですか？」
「へっ、その、わたしは、わた、わた」
「綿？　渡部？　四月朔日（わたぬき）？」
「わっ、たったっ、った、」
「おいやめてやれ危ないそいつの名前は渡良瀬だ、いいから離してやれ律希！」
「はーい」
　ぴたりと動きを止めた律希はごめんねー、と思ってもいなさそうな笑顔で言ってまほらの肩をぽんぽんと叩いた。まほらは頭をぐらぐらさせながら、手を振って気にしていないとアピールする。紅林と三月は胸をなでおろした。

もしもまほらが本当にスパイでありこの魔力量を制御できる偽術師だった場合、ヘタな言動などのためにこの町ごと紅林たちが滅される可能性も無きにしもあらずなのだ。何も知らず不躾な行動をとった律希のために本懐も遂げることができずにやられてしまうというのでは、あまりにもあんまりだと紅林は思った。

しばらくして揺れが止まったまほらは、すわりの悪い首の位置を正しながら、挨拶に移った。

「あの、わたし、渡良瀬まほらといいます。その、自分でもなぜここにいるのかよくわかんなくて、いわゆる記憶喪失という奴みたいなのですが」

周囲の様子をうかがいながら、まほらは手短に現状を説明する。律希はおおげさなほど驚いていたが、たった今紅林に説明された三月はどう応じたものかと困っている。おまけに律希が初めてしまった自己紹介の流れは崩しがたく、紅林はもう自身の紹介を終えているため三月をせっつくしかなかった。まほらに恐れを抱いたためか、嫌そうになおも紅林を見る三月だが、こればかりは助け舟も出せそうにない。

「……え、と。初めまして渡良瀬さん、私は如月三月。吾朗の上司だよ」

「上司さんですか。すると、偽術研究機関のＡＣＯにも」

「ええ、一応はあそこの出身かな……第一級国家偽術師の資格も、持ってる」

うわあ、と感嘆の悲鳴をあげたまほらは、尊敬の念が感じられる視線で三月を凝視した。三月の方はというと、もともと年下と接するのが苦手な節があるためか、しきりに紅林の方を見て助けを乞う。そのように見られてもこれからしばらくは一緒に過ごすのに、と思いながらも仕方なく三月の横へ進み出た紅林は、話題を継いで自分から三月を紹介した。

「普段は『第一級国家偽術師・東海地方大竜地脈第三組成研究所首席研究所長の如月三月です』と厭味ったらしいくらい長い自己紹介

をする俺の上司だ」
「あんた、どういう紹介をしてるんだよばか」
「ＡＣＯに居た時も俺の先輩という立場だったが、こうして今も先輩風を吹かせようとしていてほとほと困ってる。お前もＡＣＯ出身なら、こいつの後輩になるからな……おい三月、あまり手厳しく接してやるなよ」
「私はあんたみたく無礼な奴以外には厳しく接したりしないよ」
「ウソつけ、職場の暴君」
「吾朗」
ふざけてみたら乗ってくれたのでてっきりまほらに思惑がバレないよう演技してくれているのだと判断した紅林だったが、半笑いで横を見ると三月は噛みつきそうな目つきで紅林の眉間を睨みつけていた。先ほどの沈黙の時よりもなお、紅林には恐ろしい様と映った。
「吾朗？」
二度目のコールは妙に語尾が跳ね上がっていて、そのことが奇妙な威圧感をもたらしていた。
「……まあ、あんま怒らせない方がいいのは確かだな」
「よくわかっているじゃないか」
怖々と口にすると三月は紅林からそっぽを向いて階段をあがっていった。生きた心地のしなかった紅林は止まっていた呼吸を取り戻すと、「おっかねえ」と階段の上にいる彼女には聞こえないようささやいた。
「だめですよ、ああいうこと言ったらー。三月さんは等級のこと気にしてないって示そうと常に気にしてるんですから」
「そりゃそうだろうよ……あいつ、俺とはちがって？一国（いっこく）？なんだからな」
遠い目をしつつ、またも後半部分はささやくに留める。律希はなにか言いたげにしていたが、耳ざとく一国という単語を聞きとったまほらが先に、首をかしげて問いかけた。
「一国、ってなに？」

「あー、第一級国家偽術師のことだ。同じように二国（にこく）、三国（さんごく）、ときて地方偽術師は一地二地三地（いっちにちさんち）って呼んでる。偽術師の等級についての俗称だよ」
「へえ……そんで、紅林さんは？」
　続けざまに無邪気に、単なる興味本位の好奇心で言ったのだろうが、紅林には少し答えにくい質問だった。彼の事情を知る律希も問題が発生した、という顔で目を逸らしており、弱り気味の紅林は「四地（よんち）」と自嘲しつつ言った。
「四……四？」
「最下級の、第四級地方偽術師だ。その気になれば、中高生でも三地の資格はとれるのにな」
「え……？　でも、だって、ＡＣＯにいたってことは、少なくとも国家偽術師資格がとれるだけの技が身について」
「ない。だから俺はあそこをやめた。……ずいぶん苦労したぜ、おかげで偽術師として働く道は閉ざされて、二年前までフリーターだったからな。無事にＡＣＯ卒業して出てきた三月が研究員として拾ってくれなけりゃ、まだ同じようなことしてたはず」
　その経緯があったゆえに、紅林にとって偽術研究は食うための手段にすぎず、誇りもなにもありはしないのである。そして研究に関与して様々な提案や成果をあげたとしても、技が身についていないため成果の実践はできず、資格がないため研究発表に際して表舞台に名をあげることもできない。
「覚悟はしてた、はずなんだがな。なんだか、なぁ」
　情けない声をあげた紅林は、心底面倒くさそうに頭を掻いた。気まずいことを聞いてしまったとばつの悪そうな顔をするまほらだが、紅林は特に何も言わず、背後の階段に気配を感じて振り返った。すると、三月が玖珂を連れて降りてくる。どうやらまほらがここに滞在することについて、一応はここの家主であり最年長者でもある玖珂に話を通しておこうということらしかった。
　玖珂はデザインナイフ片手にゆらゆらと階段を踏みしめ、律希、

紅林、まほらの順に視線を動かして見定めた。もともと玖珂が怪しげな風貌であること以上に、刃物を持っていることがあってか、臆したまほらが身を縮めた。
「やあ紅林くん。頼んでいたルートビアを渡してもらおうか！」
「ねえよそんなもん。こんな流通の悪い土地で」
「おお、悲しきかな、俺の欲しいものはだいたいここにないな！ ふっ、だがそれでいいのだ。人は常に欠けたものを探しあらゆるものにその欠片の影を見る！ そうでなくては俺の作品にも意味などありはせんわ！ そもそも芸術とは今の世の規格規定というものに」
「その話まだ続くのか？」「いいところに入ろうとしていたろうに！ 芸術というのはだな」「急いでんだよ」「……く、仕方あるまいな、次の講義はしかと予定しておくぞ紅林くん。で、なんだったか？ たしかその子をここに住まわせたいのだったか？」
早口の玖珂が呼吸のためにわずかに黙る隙間へと言葉を挟みこんで制した紅林は、無言でうなずいて後ろに立ちすくむまほらを指差した。玖珂は片手にデザインナイフを持ったままつかつかと詰め寄り、いろいろな角度からじっとり眺めまわした。まほらは身をかわして近付かないようにしているが、一向に気にせず玖珂は彼女の周囲をぐるぐる回る。しばらくそうしてから、ぐわばっと玖珂が紅林の方を向いた。
「美少女だな！」
「それ今関係ねぇだろ」
しかし玖珂、満面の笑みである。まほらがのけぞるようにして逃げようとしている。紅林は無理もないだろうごめんな、と同情するしかない。
「いやいや俺は美しいものか醜悪なものにのみ興味惹かれるのでな。住まわせて近くにいる人間もどちらかの方がありがたい！ よって家主としては問題なく住まわせようものさ。いやむしろ俺から食費と衣裳代と滞在費用の他にお小遣いを出してあげてもいい！ ただし」

「ただし？」
「衣裳の決定権を俺に置くことの他、指定した衣裳でモデルをやっていただきたい！　いや、正直三月くんも律希くんも写真は結構な数撮影しているのだが、若干飽きてきたのでな！」
「教授ちょっと裏で私とお話しようか」
「あたし面と向かって撮られた覚えないですよ？」
女性陣二人が盗撮の可能性に思い当たり、特に三月が厳しい追及と厳罰を辞さない態度で、腕組みしながら玖珂の白衣を踏みつけ逃げられないようにした。長い裾を切らずにいたことが裏目に出たと理解した玖珂は、恐怖に慄きつつも最後の足掻きか二人に人差し指を向ける。
「言っとくがきみら二人ともカメラ向けた時の写真映り最っ悪だからな！　作り笑顔がヘタすぎるのだ！　あと三月くんなどは平素の姿が虚飾と偽りに彩られているのでそうでない時の写真を撮らんと欲す」
紅林と律希が憐憫の情がこもった目つきで三月を見る中、赤くなった三月は玖珂の肩甲骨付近を掌底で殴りつけた。三月が怒りに駆られる理由がわからず、引き気味で騒ぎを見つめていたまほらは、思わず紅林に確認を取った。
「……あの、紅林さん、言ってたのとちがくない」
「俺も知らなかったんだ、盗撮のことなんて」
正直に述べた紅林に、頭痛がしてきたとつぶやいてまほらはこめかみを押えた。
「いや、別に変なことはされないと思うぞ？」
「いやだよこんな変な人と一つ屋根の下にいるの」
「だが基本的にあいつ作業場兼自室にこもってるから、鉢合わせもしねぇはずだぜ」
「基本いないとしてもひょっこり現れたら心臓に悪いじゃない……見た目からしてちょっと怖いもん、この人」
だるだるとしていて、サイズがあっていないのか引きずるような

裾の白衣。常に猫背で前かがみの姿勢は、表情に陰を落として落ちくぼんだ瞳からさらに光を奪う。もじゃもじゃと焼きそばのごとくちぢれて傷んだ髪の毛も伸びに伸びていて顔を隠し、余計に不気味さが際立つ。

慣れてきたために紅林も何も言わないようになってきていたが、観察してみると不審人物の素養がかなり出そろった外見であった。

「なあ教授、あんたイメチェンできねぇのか」

「脱げばいいのかね」

「ダメだ服装って概念に不純物が混じってる」

「なにが不純だというのかね。そもそも防寒具以上の皮をまとうことの方が不自然かつ不純と呼べるものだろうに。人の原初の姿に回帰することに不合理なことなどありはしない！　だから三月くん、きみもいい加減胸に無駄な皮を詰めることはやめたまえ。見栄張る努力はもっと別のところに働かせるべきだ！」

「教授もいい加減あんまお金にならない道楽で作品つくるのをやめてしまえばいいよ！」

「くく、俺は不動産収入があるのでね。働かなくてもいいのだよ！」

「わ、私よりひとまわり年上だというのに」

「ふはは、働いたことなど一度たりともないわい！」

わーわーと不毛な言い争いで時間が空費されていく中、滞在については玖珂より許可が出たので、問題を片付けた紅林は二人の言い合いにはさほど興味も無い。

残る問題は所在なさげなまほらが自分の立ち位置がわからないのかおろおろと足踏みしていたことだ。不憫に思った紅林が声をかけると、びくついてから彼を見上げる。

「……騒がしいし、変な奴もいるしでけっこう面倒な場所かもしれねぇんだがさ」

「うん」

「それでもお前を追いかけたり突き出したりする奴は、いねぇよ。なんだか事情はわからないが、一時でも落ち着いて物を考えられる

方がいいだろ？　失くしてる記憶も、取り戻せるかもしれないしな」
「……うん」
なんとかここへ留まらせようと、紅林はなるべく選んだ優しい言葉をかける。
もちろんそこには貴重なバレッジの存在を逃してなるかという思いが大きくあったものの、事情も理解できぬまま追われ逃げ惑い恐ろしい思いをしたのであろうこの少女に、同情する気持ちがあったのも確かであった。
「まだお前子供なんだから、周りを頼れよ」
「でも、それ……本当に、迷惑じゃ、ない？」
「迷惑だと思う奴がいるとしたらそいつが子供なんだ」
呼びかけると、まほらはまだ逡巡していたが。律希が笑顔で横合いから出てくると、突然にまほらの肩を叩いたのでびっくりして顔をあげた。
「あたしはにぎやかな方がいいですよ！　女の子増えますし。ガールズトークできますし」
「そりゃお前はいいだろうが、まほらの方はわからないだろ」
「いいでしょう、まほらちゃん？」
紅林にうまく誘導される形で、律希が尋ねる。紅林とは違い打算なく単純に、楽しそうだからと好意と厚意を振りまく律希にこう問われると、首を横に振るのは難しい。しかしこれでもまほらはどうしようかと迷う様子を見せたが、いつの間にか言い合いをやめてこちらを見入っていた三月と玖珂に気付くとこうまで言わせて断る方が失礼に値すると思ったのか、頭を下げて「しばらくお願いします」とつぶやいた。紅林をのぞく三人がどよめいた。
「ん、じゃあよろしくお願いしますねまほらちゃん」
「芸術に興味は無いかね」
「教授そろそろ黙っておきなよ」
なにやらわいわいと、また騒ぎが起こりそうな雰囲気になりつつある。紅林はこそっと抜け出すと冷蔵庫へジンジャーエールをしま

いにいき、掛け時計を見て今日の日付などを確認した。ひとまず、落ち着いたことに安心する。次いで、自分の計画にうまくまほらを誘いこめそうなことに期待を抱いた。

圧倒的なあの魔力量。まほらの記憶が本当にないのかそういうフリなのかはわからずとも、アレを利用できる機会は巡ってきそうだった。落ちぶれ、技もなく、研究をしても正当に評価されることはもう二度とない。そんな自分であっても、這いあがるチャンスが到来した。

「……あとは、バレッジをうまく使わせてもらえるように誘導しなきゃな……」

つぶやきはかしゅ、と開けられたジンジャーエールの音に掻き消された。

そこでなんとなく自分の背を見ている人間がいた気がして紅林はホールの方を振り返ったが、四人とも談笑しているだけである。不可解には思ったがあまり気にせず、紅林は缶の中身を飲み干した。酷薄な笑みが、唇の端で暗い感情をかたどっていた。

4　新規入居者の面倒

「初動が遅い、それじゃ迎撃の前に切って落とされるぞ、律希」
「はい師匠！」
「つないでからの、攻撃の流れはいい。だが目がおざなりだ、一ヶ所を注視するな」
「はい師匠！」
　繰り出される律希の左掌底、右水平手刀、左背足蹴りをいなし、受け、かわしながら紅林は教えを口にし、律希もそれを動きに反映させようと努力する。
　紅林たちの住まう洋館はぱっと一見すると雑木林にしか見えない広い庭を持っており、その一角の土を均した場所が律希にとっての道場となっていた。早朝の涼しく湿り気を帯びた空気の中、シャツにショートパンツ、スニーカーを身に付けた律希は、汗を散らして絶えず紅林に連撃を撃ちこむ。響く音から察せられる一撃一撃の重みは、十六歳女子のものとは思えない。
「攻撃の時は注視することで、フェイントになる時もあるが。防御の時は敵の全体を見て動きの起点を探せ。相手の視線、踏み込み、姿勢、仕草、重心。鏡で自分を見て、そういうのを研究するのもいい」
「はい！」
　相対する紅林はというと、寝巻のパジャマにサンダル履きで律希の攻撃をさばいていた。服装だけ見るといかにもやる気なさげであるが、目は真剣そのものである。だが、律希は彼以上に真剣だった。左ジャブと共に踏み込んだ左足に力を込めると、右足を振り抜いた。
「せあ！」
「読めてる」
　ぴし、と落ち葉を砕いて鋭く伸びてきた右ハイキックを屈んでか

わし、紅林は軽く掌で律希の胸を押し込んだ。咳こんで動きを止めた彼女の背をとんとんと叩いて息を正しながら、紅林はのんびりと訊ねる。
「あと、さっきの五点に加えて大事な点がもうひとつあるが、なんだかわかるか？」
「けほ、えほ。え？　さっきの、えー、と、視線、力点、作用点……」
「お前なにを聞いてたんだ。視線踏み込み姿勢仕草重心だ。メモっとけ」
「ははあ。メモメモ。それで、最後の重要ポイントはなんです？」
「最後の俺の攻撃がヒントだ」
息を整えた律希は身体を起こすと、身なりを見なおすように自分の身体を見下ろした。最後に受けた攻撃の位置、剣状突起の上の辺りをぽんぽんと叩くと、ひしと己の身体を抱きしめてほんのりと恨みがましい目で紅林を見た。
「……すけべですねー」
「よしこれでお前は破門だ永久にさよなら」
「まっ、まってください師匠！　冗談です！　冗談ですから！」
洋館に帰ろうとする背中に追いすがる律希に、紅林はものすごく嫌そうな顔をしながら振り向き、人差し指をつきつけて彼女の眉間を弾いた。
「ジョーク、禁止だ。嫌がる俺に稽古つけろってテメエがせがんだ時、ちゃんと言っただろが。少なくとも稽古中は性別忘れろ、でないと俺も本気で教えられねぇ、って」
「ははは、セクハラ目的のエセ武道家も同じこと言いそうですよねー」
「年齢のわりにちょっと発育良いからって調子乗ってんじゃねぇぞクソガキ。そもそも俺が教えてんのは武道じゃない」
「でもでも、思ったんですけど、それだと稽古のあとは師匠と弟子じゃないんですよね」

「そうだよ。だからいつも師匠って呼ぶのをやめろと言ってるんだ」
「はっ。ひょっとしてそれって師弟関係ではなく男女関係を求めて……みたいな」
「安心しろ俺お前のこと外では？知人？って呼んでるから」
「ひどい」
「で、六番目の重要点はわかったのか」
無駄話を強制的に切りあげた紅林に問われて、律希は目を泳がせて考えるフリをはじめる。そう、残念ながら素振りだけであり、そもそも先に言われた五点もロクに覚えていないようだった。毎度のことであったが、紅林も我慢して答を待つ。
「あー、えー、か、構えですか？」
「構えは姿勢の内に入れとけ。六番目に大事なのはな、呼吸だ」
呼吸、と言われて先ほどの息苦しさを思い出したらしき律希は胸を押えてああ、と納得した声をあげた。
「お前こうやって身体に教え込まないとすぐ忘れるからな。呼吸の間を見極める、それが六番目の重要点だ。試しにまた構えて、俺に一撃打ってみろ」
言われた通りにオーソドックスな構えを取った律希は、なんとか紅林の隙を見つけて打とうとしていた。しかし結局その一打は初動を見切られて、左のジャブは外に流れ、流した勢いで律希の前腕内側を滑ってきた紅林の掌が肉薄し、鼻の十センチ手前で止まった。
「まあ、俺の呼吸を読もうとしたのはいい。が、自分の呼吸を読まれるのも考えとけ」
「えええ？　ちゃ、ちゃんと考えて、一定のリズムにしましたよー」
「それがダメなんだ。打つ瞬間って、息を止めるだろ？」
指摘されて、律希はまた構えを取り、試しに打ちこんでみる。確かに、口が閉じ、息が止まり、拳が出て――と、ここまできてようやく律希は気付いた。
「あ」
「ようやくわかったか。間抜けに開きっぱなしのお前の口、攻撃の

少し前に息を止めるために閉じるんだよ。そこを見切ればあとは拳にビビらなきゃ、誰でもこれくらいできる」
「なんとまあ。でもそんなら、先に口閉じて打つように心がければ師匠に一泡吹かせることも」
「無理だな、お前つなぎは上手いけど単調で馬鹿正直な連携しかできないから」
今日はおしまいだとつぶやいて洋館の方へ今度こそ去ろうとする紅林は、小腹が空いてきたこともあり脇腹をさすっていた。
「えー、せっかくポイント教えてもらえましたのにー」
「一度にいくつも覚えられないだろ。反復練習して呼吸消すの覚えてこい」
むうむむ、と納得しかねる様子のうめきで紅林に稽古続行を要請する律希だが、取り合うことなく紅林はきびすを返して去る。その背中に追いすがって――無理やりにでも稽古に引き込みたい律希は、不意打ちで横蹴りを放った。
途端に左半身になって向き直り、紅林はいなさず肘で律希の足刀を受け止め、体勢を崩したところへ下段突きを落とした。もちろん寸止めである。
「足音で気付くわ、アホ」
「だはー、隙はどこにあるんですかー」
「今現在お前に突ける隙は無い。もうあと二、三年修行してようやくってとこだろ」
大の字になって寝転ぶ律希はじたばたと手足を震わせて、どうにも超えられない壁を見るように紅林の方を見上げる。律希が教えを請い始めた当初、紅林は「それほど高い目標とも呼べないからもっとまともなところで学べ」と突き放した。ところが彼女は聞く耳を持たずにつきまとい、ついにはひとつ屋根の下で暮らすようにまでなってしまった。
なんで俺なんだよ、と律希本人に訊ねたこともあったが、明確な返答は得られず今に至る。厄介な同居人であるが、幾分運動不足に

なりがちな研究員という職種に就いている身として、健康維持にちょうどいいか、などと紅林はしぶしぶ納得することにしていた。
「ほら、そろそろ朝食だ」
「ですか。あたしは汗かいたんでシャワー浴びてからにします」
「そうか。ほれ」
呼びかけると寝転がった律希に手を差し出し、身体を屈める。うれしそうに手を伸ばしてきた律希はがしっと指をからめるように手を握るが、紅林は顔をしかめると素早くそれを振り払った。律希はまた背中を地面にくっつけた。
「へ」
「握手じゃねぇ。さっさと出すもん出せ。おらおら」
投げだされた律希の両足首をつかんだ紅林が、足から腰までの下半身をがっくがくと上下に揺さぶる。ぎゃあああ、と朝の雑木林に甲高い悲鳴が響き渡った。次いで、小銭が落ちる軽い音。足首から手を離すと、素早い動きで紅林がそれを拾う。
「ひのふのみの、二枚足りないぞ。あと二百円」
「う、うう……すいません師匠、あとで支払います」
紅林にとっては、健康維持と共にビジネスでもある師弟関係だった。
館の中に戻ると三月が朝食の用意を済ませており、靴を脱いでホールにあがった紅林は匂いにつられるようにダイニングへ、シャワーを浴びる律希は共用の風呂場へ、それぞれ分かれて行った。
「おはよう、いつものことながらご苦労様だね吾朗」
「労うくらいならお前が代わりにやれよ」
「私はもうだいぶ忘れてしまったんだよ、そういうのは」
「ウソつけ。もの覚えのいいお前がそう簡単に忘れるわけねぇよ」
スキニージーンズに胸元からしぼってある紺色のカットソーを着て、長い黒髪をひとつに束ねた三月はエプロン姿でせわしなくキッチンの中をうろついていた。紅林は席に着くとトーストにバターと小倉餡をたっぷり塗りつけて皿に置く。その内サラダ、スクランブ

ルドエッグ、ヨーグルトなどが運ばれてきて、やにわにテーブルの上は食卓の様相を呈していった。
「渡良瀬は？」
「まだ寝ているんじゃないかな。あの部屋は布団もベッドも一番質の良いものだしね」
「来客用だったか。だが寝具に金かけるってのは俺にはわからない感覚だよ。にしても、まあ、きっちりもてなしたおかげか、少なくとも寝込みを襲われることはなかったようだな」
屈み、テーブルの脚と小窓の間に渡していたテグスと鈴をパジャマのポケットにしまった紅林を見て、三月が目を丸くする。
「いつそんなもの仕込んでたんだい？」
「昨晩お前らが寝静まってからだよ。各部屋の前にもテグス張って引っかけといたんだ、音がしたらすぐ駆けつけるつもりでな。しかしお前、昨日渡良瀬の受け入れに難色示したわりには、ずいぶんとぐーすか寝てやがったもんだな」
「それは、あんたが手は考えとくと言うから安心させてもらったんだよ」
「四地の俺にそこまで頼りきるなよ」
あくび混じりに応じた紅林を見て三月はなにか言いたそうに口を開いたが、結局何も言うことなくキッチンの方へ戻っていく。言わないのなら必要のないことと判じた紅林は、朝食の準備ができたことを伝えに二階へ上がる。
ホールにある階段をあがり、吹き抜けの階下を見下ろすと早くも律希がほくほくした顔でキッチンへと歩いていくところだった。ぼやぼやしていると彼女に全てをたいらげられる可能性もあったため、紅林は急いだ。しかし二階奥にある玖珂の部屋には『精神統一中』と張り紙がしてあり、中からごりごり何かを削っている音が聞こえる。
「そっか、昨日飯はしばらく要らないとか言ってたな」
製作に入り集中しはじめると玖珂は毎度こうだった。といっても

完全に断食しているわけではないらしく、一週間ほどこもってから出てきた時になぜか少し肥えていたこともあったので住人たちもさほど心配はしていない。よって呼びだすことはなく、回廊をぐるりと回った反対側にある空き部屋、まほらに与えた部屋の前へ行き、ノックする。

「渡良瀬起きてるか、朝食の時間だぜ」

とんとんと叩いても、返事は無い。不審に思い、ノックを強める。するとまたも返事がなかったので、不信に囚われ始めた紅林の頭の中には嫌な図しか浮かんでこなくなった。

夜中の間に館から抜け出し、偽術研究をスパイすべく研究所の方へ向かったのではないか？

「っ、渡良瀬、入るぞ」

焦りを覚えつつドアノブをひねって部屋に入る。すると、クローゼットと書斎机とベッドしかない部屋の中、力尽きたように布団にくるまっているまほらが、なぜかベッドの上では無く部屋の隅で眠っていた。

「……なんだ、本当にまだ寝てるのか」

身体を丸めて布団に埋もれるまほらは、耳をそばだてても聞こえないくらいに微かな寝息を立てながら、深く眠りこんでいた。朝食がなくなることを心配した紅林は近づいて起こそうとするが、そこでふと気付く。

まほらの目の下には、年齢に似合わないくまがうっすらとにじんでいた。昨夜は初体面が夜の屋外で、明かりのある館についてからは所在なさげにうつむいてばかりだったためか、まったく気付かなかった。――ずっと逃げていたんだっけな、とくまの理由に思い当たって、紅林は静かに立ち上がった。

今後の彼女の処遇については、正直なところ紅林も自身の計画への利用の後はなにも考えていない。様々な研究への転用が可能な、第一級国家偽術師さえ圧倒する魔力を保有する強力な？バレッジ？すなわち魔力貯蔵タンクを持つ少女。

魔力は、空間への影響力の他に魔力同士で引きあう性質を持っている。それゆえ偽術を行使する際にはまず自身の魔力を触媒に術式で周囲の魔力を集めることから始まるのだが、生まれつきの魔力貯蔵量が多い者はそれだけで大規模な偽術を操る素養があることになる。

それは大竜事変以降、魔力がさらに薄くなった地脈断層大地外部でも、強力な術式、広範囲へ効力を及ぼす偽術を使えるということだ。たとえば空間を拡大する偽術と空間内の重量を軽減する偽術を併用すれば、狭いワンルームを数十人が収まるオフィスに変えることもできる。たとえば空間内の重力方向を操作する偽術を使えば、重機無しでも建材を運び低コストで仕事を成せる。

資格と階級が肩書きと技を示すものならば、魔力の多寡は偽術師にとっての実際の力である。それがかつて対災厄機構――？Ａｎｔｉ Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ？に所属していた紅林が、四地に身を落としてようやく実感に至った、真理である。

「……まあ、」

今は、休んでいればいい。同情からくる気持ちか、彼はそう思って扉を閉めた。

紅林はまほらの部屋をあとにすると一階に降りてから自室に戻って白のワイシャツと黒のボトムスに着替え、部屋を出る前に戸棚の上に置いていた紙袋を手に取る。片手に袋を携えてダイニングへ行くと、三月と律希の二人はもう食べ始めていた。

「まほらは降りてこないのかい？」

「まだ眠ってた。逃亡生活で疲れてるんだろ、そっとしといてやろうぜ」

「師匠が人のこと気遣うのなんてめずらしいですね」

「しばくぞ律希」

「しばくよりしごく方が得意じゃないですか、師匠は」

付き合っていられないと思って、律希から目を逸らすとトースト

にかじりついた。ひとしきりもくもくと食べ進めて、テーブルに並んだその他のメニューも腹に納める。残りは冷蔵庫に入れておいて、まほらが目覚めたら食べさせることとした。
　ほどなくして、食後の一杯に三月が紅茶を淹れる準備を始めるが、紅林は横から割り込んで白湯のみを貰い受ける。そこに水を注いで少し温度を下げ、ぬるくしたところで紙袋から取り出した錠剤を喉に流し込み、一息ついた。

　昼前にようやく起きてきたまほらは、ダイニングで本を読んでいた紅林を見ると一礼して、向かいの席についた。
「おそよう」
「えと、遅いことは、認めるけど」
　もにょもにょと反論のようにつぶやいたまほらは、寝巻として律希から借りたジャージの、あまった裾を擦り合わせながら紅林の方を見た。髪留を外しているので鎖骨に届くくらいまで下りた髪、そこへ隠れた表情はうかがい辛く、紅林はどう言葉をかけたものかと迷う。
「とりあえず、なんか食べるか」
「うん」
　冷蔵庫から取り出してきた朝食と紅茶を電子レンジに入れて、九十秒ほどで取り出す。ほどよく温まった食事をみて、満足げにうなずいた紅林は食事をトレイに載せて振り返る。
　すっとまほらの方へ差し出すと、彼女は相当お腹がすいていたのか息もつかさず食べ進める。途中で紅林が呆然と見ていることに気付くとさすがに多少は自重したが、それでもペースはあまり落ちなかった。
「あんまりメシ、食べてなかったのか」
「うん、まあ……一ヶ所に留まる時間、なるべく少なくしたかったし。無防備でいられる余裕、ないから」

「そうか。でもゆっくり食べろよ」
「ん」
もぐもぐとよく食べて、まほらは出された食事だけでなく、紅林の勧めたシリアルやバターロールも食べ尽くした。よくそんな細くて小さい身体に詰め込めるもんだ、と奇妙な感心と共に紅林がじっと眺めていると、ようやく人の視線を気にする余裕が出てきたのか、はっとして行儀よく食べるようにする。
じきにすべて食べ終えて、紅茶をすするまほらを尻目に、紅林は立ち上がって本を閉じた。
「もう読み終わったの？」
「そんなにぱっぱと読み進められる本じゃねぇよ。六千円もしたしな」
分厚い革の装丁でいかにも高価な雰囲気を漂わせる本の背表紙には『十一次元座標に於ける魔力反応の固定または維持に際しての偽術運用法』と長ったらしい題が打ってある。興味をそそられたのか、まほらはカップをテーブルに置くと身を乗り出した。
「面白そう」
「実際興味深いぜ、これ。従来の方法じゃ自作の術式による魔力反応の固定には他人の術式で補えないところが多々あったが、この本の著者の考えでは固定するんじゃなく、同じ状態を観測上ではほぼ一定と見なせるくらいに連続して発生させることに考えをシフトさせてる」
「できるの、そんなこと」
「いやまだ仮説。これの著者の朽葉って奴、着眼点はいいんだけど毎度まいど証明とかの作業は他人任せなんだよな。夢のある与太話ってやつ」
「なぁんだ。でも夢があるのは、悪いことじゃないよね」
「どうだかな」
笑う紅林に、まほらはむっとした唇のとがらせ方をした。そこで、紅林同様になにか分厚い本を読みながら現れた三月が、テーブルを

挟んで談話している二人を認めて声をかけた。
「まほらちゃんも起きてきたんだね。朝食は済ませたかい？」
「はい、おかげさまで」
「そう。ところで吾朗、あんた今自由に使えるお金はどれくらいあるのかな」
「研究費のことか」
「あんた国からの予算をなんだと思っているんだよ。自由なお金と言ったら普通、給料とかのことに決まっているじゃないか」
肩をすくめる三月に、紅林は眉をひそめた。
「きゅうりょぅお？　下っ端研究員がもらえる雀の涙の給料に余りが出ると思ってんのか？」
「あんたはたしか家賃が光熱費込みで四万二千円、食費が三万弱、携帯代と電話代とネット代で二万弱、共用新聞代で八百円、月に読む研究書代が五万強だったかな。ううん、余らないね」
「把握した上で聞いてんじゃねぇよ畜生。だいたい研究書なんざ仕事のためのもんなんだから領収証切らせろよ畜生」
「研究所経由で申し込むと届くのが遅いからね。可哀想だと同情しておくとするよ」
とにかくお金はないんだね、と三月はいやにそこだけ強調した。紅林は歯噛みしてうなる。
研究とはスピード勝負の側面があり、同じ研究だったとしたら一秒でも早く成果を発表した方がその分野のスペシャリストと呼ばれ、残りは押し並べて後追い研究者と言われることとなるのだ。ゆえに、研究の元となる書物を手にするまでの所要時間についても、なるべく早く届くことが求められるのである。
そんなことは当然知っているはずの三月はポケットからブランド物と思しき財布を取り出すと、中から五万ほど抜きとった。反射的に紅林は両手を伸ばして腕の間に顔をうずめた。
「ありがたい。俺の研究書代か」
「度し難い。あんたにくれてやるなんて誰がいつ言ったんだよ」

「じゃあなんで取り出したんだよ！」
目の前でひらひらと万札を見せびらかす三月に憤慨して幾度となく手を振りかざす紅林だが、悲しいかな、三月が背伸びして上空に手を伸ばすと紅林では届かないのだった。
「クソが、身長にばっか栄養とられたあばら貧乳が」
「誰があばらだよ誰が。まだ膨らむよまだ」
「子供できるまで無理だ無理」
「……ほう。私へのセクハラとはお上をも恐れぬ図太さだね吾朗。明後日からあんたの席だけ筵（むしろ）にして残業を二時間ほど増やしてあげてもいいんだよ」
「お前こそパワハラじゃねぇか！」
言い合いをしていると、ふと紅林は寒気を感じた。振り返ると、取り残されたまほらがすごい形相で自分をにらんでいることに気付いたので、三月の袖を引っ張り慌てて取り繕う。
「で？　なんなんだそのお金様は」
「様付けってあんた、どこまで卑屈になるんだい……これは、まほらちゃんの生活用品とか服を買いに行くんだよ。いつまでかは知らないけれど、しばらくはここで生活するんだろう？」
棚からの牡丹餅が真横の人間に掻っ攫われたことについては息詰まり鬼気迫る表情を見せる紅林だったが、理由がはっきりとしていてうなずかざるを得ない内容だったので、金への執着を断ち切って首肯した。三月は腕組みして万札で口元を隠し、まほらに目をやった。
「服も律希のものでは少しサイズが大きすぎるようだしね。街の方へ出向いて一通り揃えるとしようよ」

＋

三月の運転するニュービートルに乗り込む紅林は助手席から、後部座席のまほらを見ていた。

外の景色を眺めている彼女がこちらに気付く前に視線を元に戻すと、横でハンドルを握る三月に微かな声で話しかける。
「……街に行くのはいいんだがな。出る時はともかく、入る時はどうすんだ」
「私を誰だと思っているんだい、吾朗。環境管理局の偽術師が作るパス程度、その気になればいくらでも偽造可能だよ」
「ばか、お前そんなのバレたら降格処分どころじゃすまねぇぞ」
「その時はあんたが昨日言っていた通り、脅されていたとでも言っておくとするよ」
しれっとそんな返しを言ってのける三月は、紅林の危惧をなんとも思っていないようだった。
その後は黙って進んでゆき、田舎の自然の中へ作られた研究用の観測装置や収集装置である白い塔のような建造物がいくつも横を過ぎる。まほらはそれらに興味を持ったのか、視界をよぎっていくたびに目で追っていた。紅林はちらちら、そんな彼女の様子を観察していた。
十分も走らないうちに、三人を乗せた車は八尾の地脈断層大地の端に着く。つづら折りに切り崩して作られた道への出入り口である無機質なコンクリートの門は、検問のように気まずい空気が流れていて紅林の嫌いな場所だった。門のカメラが車の接近を認めると、横の詰所の扉が開いた。
そこから現れた警察に似た制服姿の男たちは皆、第三級国家偽術師以上の資格を持っている。彼らこそが地脈断層大地の研究を守るべく組織された？環境管理局？の局員であり、国にとって重要な偽術研究を保護するこの地の番人だった。
また、偽術を研究対象ではなく戦闘手段に特化させた彼らもかつてはＡＣＯに所属し偽術を学んでいた人材であり。紅林にとってはわずかながら関わりのあった人物もいるため、運転席の三月に隠れるように身を縮めた。
「身分証を拝見」

「はいはい」
やる気なさそうに三月は財布を探り、自分の研究者ＩＤなど個人情報が記載されたカードを渡してハンドルにもたれかかった。ついで、紅林たちに向けて空間の情報を認識する偽術が使われ、車の中に研究に要する物品や研究成果の持ちだしがないかを確認される。
五分もしないうちにＩＤカードは返却され、局員たちは帽子をとって会釈した。
「ありがとうございました。今回は長期外出許可証をいただいておりませんので、二日後の十月十日午後十四時までにお戻りください」
「はいはいごくろうさま」
適当に受け答えすると、三月はエンジンをかける。ちなみに第一級国家偽術師であるところの三月と一緒でなければ、これだけの短時間で通り抜けることは普通、できない。
以前必要があって紅林が外出許可を取ろうとした際には、第四級地方偽術師という存在自体があまり知られていないこともあり、五時間ほど確認に手間を取られた。
自分がいかに社会にとって取るに足らない存在であるのかを思い知らされたのだ。そのこともあって紅林は、この門を通ることがあまり好きではなかった。
「……あ、ところで」
「はい」
パワーウインドウを閉める間際に、三月は一番近くにいた局員に話しかけた。横の紅林でも聞き取れるかどうか、という程度の小さな声である。
「ここ最近、なにか変わったことはなかったかな？」
「変わったこと、ですか。いえ、特別にご報告するほどのことは何も起こっておりませんが、なにかあったのですか」
「いや、ちょっと魔力の観測値に変動があったりしただけでね。なにもないなら、いい」
ウインドウを閉めると、三月は少しだけ紅林に目配せして、自分

の問いかけの意味を伝えようとしていると見えた。即座に振り返ってしまった紅林はしっかりまほらと目を合わせてしまい、自分たちが何を心配しているか気付かれたのではないかと思ったが。幸いにもまほらは開いていく大きな門に気を取られていただけのようで、紅林の表情にはさほど注意を払っていなかった。
「環境管理局は関与してない」
「みたいだな。俺たちに隠してる可能性も、ないわけじゃないが」
ではまほらの追っ手はＡＣＯか、はたまた強大な魔力量のバレッジを狙うなんらかのグループか。どちらであったにせよ、地脈断層大地外部においては環境管理局の検問が無い分、遭遇の確率が上がると考えられる。
「少なくとも、ＡＣＯの連中かそうでないかくらいは見分けられるだろうね」
「戦闘は免れねぇがな」
「……ねえ吾朗、今あんた、偽術何回使える？」
「ああ？　一国のお前がいりゃ、俺の手なんざ借りなくてもいい猫の手だろ」
「そういう意味では無いよ」
動き出した車の運転のために三月は前を向いていたが、声音は紅林の方へ向き、案じるような意味合いが込められていた。繰り返し、三月は問い、強まった語調はまほらにも聞こえそうなものだった。
「何回、偽術が使えるんだい？」
「……？空間把握？は特に制限なく使える。俺の技で言うなら、？外延（エクステンション）？が奥行き、幅、高さのどれかを最大五メートルまで。？縮地（カット バック）？も同じ条件で、こっちは最小十センチまで。回数は……二つの技合わせて一日四回が限度だ」
「……そうかい」
三月は車の速度をあげ、一瞬、ひどく悲しげに紅林の方を見て、運転に集中し直した。
「だから言ってんだろ。俺の手出しなんざお前をわずらわせるだけ

だって。ああでもさっき、近接格闘の技術は忘れたとかほざいてたっけな、お前」

あえて三月の意図するところに気付かないフリをして、先の話題を蒸し返してからかう素振りを紅林は見せた。けれど三月の方もその紅林の意図に気付かないフリをしているのか、「そうだったね」とつぶやいてまっすぐ前を見据え、取り合わない。紅林は舌打ちして、またまほらの方を見た。

まほらはうつむいて身じろぎすらせず、眠っているようだった。紅林は腹の上に重ねた手を置いて、窓の外を見やる。断崖に囲まれた八尾の町が、眼下に広がっていた。

自然や田園地帯の中に目を引く人工物、偽術研究のための装置が点々としていて、どこか違和感のある構図となっている。この町がこうなる前、地脈断層大地として偽術研究という事業に利用される前の姿を知らない紅林でさえそう思うのだから、昔からここに住んでいた人々などはさらに不思議な印象を受けるのだろう。まるで違う世界のような。既視感と違和感の入り混じる、自分の知るものとの印象の差異。

紅林には理解できない感覚だ。彼には、昔を知る場所などＡＣＯの他になく。ＡＣＯは六十年前に大戦後の世界を牽引する新技術として偽術研究をはじめた時から今まで、何も変化の無い異質な場所であるからだ。

一度道を曲がると、今度は眼前に岩肌が差し出される。がたがたと幾度も曲がる道の上では、近くを見ると酔いを招きそうだったため、紅林はすぐに目を閉じることにした。

5　M2プランの胎動

一時間少々車で移動すると、小さな地方都市に辿り着く。生活に必要なある程度の品々は八尾でも購入することができるが、なんのかんのと言ってもいつも同じ店では飽きてしまう。まほらの服などを買うため、と言ってはいるが、実のところ三月も買い物に来たかったのだろうと紅林は判じていた。

ショッピングモールの中に在る噴水の近くに構えていた休憩所、そこのベンチに腰掛けた紅林は自らの傍らに三月の趣味・性格を主張するかのごとく積み上げられた品々を見て、溜め息をついていた。己の座高ほどの高さまで荷は重なっており、運ぶ際の重さが思いやられた。

「悪いね吾朗、たまの買い物だから調子に乗っちゃったみたいだよ」

「渡良瀬に買う分より自分のが多いんじゃねぇの、これ。確かに生活必需品も含まれてはいるが……どうでもいいアイテムとかも多いぞ、これ」

「たまにはこうして世間一般の流れを知らないと、研究一辺倒のカタブツ女と呼ばれるようになってしまうんだよ」

「実家戻った時にでも言われたのか？　だとしても手遅れだ、もうお前微妙にセンスずれてる」

季節外れだからか安く手に入ったらしい『プロ仕様のふんわりかき氷機（ペンギン型）』なる代物を抱え上げて、げんなりした。三月は自分の嗜好を否定されたことに憤慨した様子でかき氷機を取り上げると、有無を言わさぬ語調で告げる。

「とりあえず買ってみて、要らなければフリーマーケットにでも出すから別にいいんだよ」

「買い物ヘタな奴の常套句だな、『とりあえず買ってみる』って」

「ふん、あんたとは違って私はお金があるからねー……というかそっちは、研究書以外買っていないんじゃないのかい？　まったく、

研究一辺倒のつまらない男だよあんたは」
「俺は仕事が趣味で息抜きも趣味に費やしてるだけだ」
「疲れそうな人生だね」
「とっくに疲れてる。今は若さとランナーズハイで無理がきいてるだけだろうよ。だから、早く成果を出さなきゃならないんだ」
「……あんた、全部終わったら燃え尽き症候群にでもなりそうだよ」
「成果出せたら出せたで、燃え尽きてる暇ねぇよ」
疲れの中に狂気を匂わせる瞳をわずかに見せて、紅林は立ち上がった。
「さて、そろそろ渡良瀬も服とか選び終えてる頃合いだろ」
「どうだろうね。あんたみたく服に頓着しない奴にはわからないだろうけれど、こだわる子はとことんこだわるもんだよ」
仕事の時と変わらない服装で町まで来たことを咎められたように思って、自分の服装を見なおした紅林は大きなお世話だと三月を睨みつけた。そして面倒臭そうに腰を上げて歩き出し、ベンチからほど近い位置にあったアパレル関係の店の並びに入り込み、熱心に服を見ていたまほらに声をかける。
「めぼしいものは見つかったか」
「え？　あ」
伸ばしかけていた手を引っ込めて、そそくさとまほらは紅林に背を向ける。そのまま場を離れて店を出ると、量販店の方へ移動していった。
「あーうん。いや、やっぱそうでもない、かな」
「どっちだよ」
「こっちだよー」
量販店の中に入ると、無地の飾り気もへったくれもないシャツと似たような印象を受けるボトムスをいくつか手に取り、がさがさとかごに詰めていった。
九八〇円均一！　と銘打たれたコーナーのみから選別しているようだった。

「……渡良瀬、そんなに気ぃ使わなくていい。買うのは俺じゃなく三月だ。あいつ一応俺より階級も役職も上だから、潤沢な給料貰ってんだよ」
「……や、ちょっとの間お世話になるだけなのに、そこまで迷惑かけられないじゃない」
「気にし過ぎだ。それに実際のとこは立て替えるだけだぜ？　お前の素性がわかって親元やらが判明したら、三月はそいつらに請求する算段だからなー」
「払う気のない奴だったらどうするの？」
冗談で放った言葉に、まほらは心配そうな顔でそう切り返してきた。紅林も言葉に詰まる。だがすぐに冷静さを取り戻して「まほらがスパイであり機関などから送り込まれている可能性」を考慮に入れ、溜め息ひとつの間に思考を巡らし、努めて軽く流すように言う。
「引き続き預かる形になるだろうな」
「いいの？」
「無条件に甘やかすわけじゃねぇぞ。きちんと働いて生活してもらう」
半分はバレッジを利用させてもらう言質を取るつもりでこのように言い、紅林はまほらの反応を見る。まほらは戸惑う様子を見せるが最終的にはこくりとうなずき、笑顔を見せた。
「よし、とりあえず秋から冬の間着れそうなもの選んでこい。別にこんな安いのじゃなくともいいから好きな奴持ってこい」
「自分が払うわけじゃないからって、よく言うよね」
「他人が金使ってるとこ見るのは嫌いじゃない」
貯蓄できていない自分のことをみじめに思わず済むから、という卑小な理由は述べず、紅林はまほらの横を歩く。前の店に戻ると、彼女は先ほど手を伸ばしかけた服を取り、サイズがあっているか身体の前にかざすなどして嬉しそうだった。
「こういう服着るの、はじめてかも」
「昔の記憶は残ってんだろ？　その時も今みたく、質素っつーか殺

風景な服装してたのか？」
「まあね。お金、なかったみたいだから」
「親が、か？」
「ううん、養育施設。でもその後わたしがどうなったかは、まだぼんやりしててわかんない」
「そうか」
「めずらし」
「なにがだ」
「こういう話するとだいたい、『悪いことときいたな』『すまないな』って言うのが定番じゃない。紅林さん、そういう反応ないから」
「定番だろうがお約束だろうが、んなセリフは言う必要ないだろ。自分にとっては普通のことについてわざわざ謝られると、そいつから自分が下に見られてるように思えて若干不快なのはわかってる。俺も経験があるからな」
　まほらがハンガーを握る手が、少し震えて縮こまった。
「……同じ、なんだ？」
「俺は養育施設じゃなくＡＣＯの内部組織だったがな。なんにせよ天涯孤独に変わりはねえ」
「そこから出てきて、寂しくなんない？」
「ふっと寂寥感に襲われる時もあるが、別段あそこを出てきたからってわけじゃなくそれは昔からの感覚だからなァ。施設離れても、さほど変わりはねぇよ。その頃の知り合いもいるしな……今じゃ上司になってやがったけど」
　嘆息する紅林に横顔を見せたまま、まほらはそっかー、と安心したような面持ちで微笑み、紅林にかごを持たせると次々に衣服を放りこんだ。支払いは三月持ちなので構わないのだが、急に元気になったことに少々戸惑う。しかしすぐに、気にすることもないかと思い直し、右腕に増えて行く負荷を感じながらぼんやりと中空を見続けた。
「買うものは決まったのかい？」

「あ、三月さん。えと、とりあえずこんなところでお願いしたいんですけど」
　ふと現れた三月がまほらに問いかけ、かごの中身をふむふむと値踏みするように眺める。デザインこそ洒落たものが多いが、値段としてはこの店の中でも中の下といった品が揃っていたので、紅林にこっそり「まだ遠慮しているのかな？」と囁きながら、レジの方へ移動して会計を済ませた。まほらが頭を下げる。
「ありがとうございます、こんなに買っていただいて」
「いいんだよ、女の子はいつでも綺麗にしていなくてはダメだからね」
「でもこんなにいっぱいの種類から服を選ばせてもらうのも、初めてだったんです」
　この発言に三月は首をかしげたが、紅林がまほらから見えない角度で「俺と似た境遇だ」と耳打ちしたため、ああ、と納得した。そしてやはりというか、仕方のないことではあるが、定番の憐れむような顔色を一瞬だけのぞかせた。すぐに、引っ込めたが。
「野郎だったら、吾朗みたく年中ワイシャツに黒のボトムスでも一向に構わないけれど。女の子は着飾ることを知ってもいいんだよ」
「うるせぇよ、俺は常にありのままなんだよ。お前みたいに服装でまな板をカバーするような姑息な真似はしねぇんだ」
　胸元から緩く絞ってあるために体型をごまかしやすい服を着ていた三月は、紅林の指摘に眉根をひくつかせて左手を頤にあてがう。紅林越しに店の奥を見据えて、ぼそりと言った。
「吾朗、五メートルくらいの高さから突き落としてあげようか？」
「やめろよお前が言うと洒落にならねぇ」
「誰が洒落てないって？」
「服装のこと言ったんじゃねぇよ！　引きずりすぎだろお前」
「人前でコンプレックスを指摘されたら引きずるに決まってる……」
　がっくりと肩を落として沈んだ表情を見せた。
「気遣いという言葉を知らないんだね、あんたは」

「真顔で静かに言うな、さすがに心に刺さる……悪かったよ。でもお前コンプレックスに執着しすぎる必要は、まったくないと思うぞ。他で補って余りあるほど長所あるだろ」
「……たとえば」
「背は高ぇが脚も長いから均整取れててスタイルは良いだろ。長い黒髪でも手入れ行き届いてるからやぼったく見えないだろ。険のある目つきだが瞳は澄んでてきれーだし、睫毛長くて色気もある。あとは、」「も、もういいよ。というか、吾朗。見た目に関するものばかりじゃないか」「料理できるだろ、世話焼きで人のことよく見てるだろ、そのせいか人づきあいは幅も深さもあるだろ、あと」「もういいもういい」
冗談で挙げるだけ挙げてみると三月は片手で顔を隠しつつ制止をかけ、紅林は口の端をつりあげた。長い付き合いで、彼女が褒められることを苦手としていることはよく知っていた。
「さて、買うもの買ったなら行くとしようぜ。荷物多いしな」
「あ、紅林さん。とりあえずわたしの服もよろしく」
「あん？　ってお前やめろ、俺すでに三月の分の荷物持ちで手いっぱいなんだぞ！　なんでさらに追加するんだよ！？」
「え、なんで？　まさかわたしに持たせる気？　こういうのは男の仕事でしょ？」
口をとがらせて紅林の前を過ぎ去るまほら。気のせいか険のある顔つきで、また腕に吊り下げられたまほらの服が入った紙袋は、妙に重たさを増しているように感じられた。
「なんだってんだよぉ、おい。そもそも昨日から言おうと思ってたがな、お前いちおう敬称はつけてくれてるけど、どうして俺と話す時タメ口なんだ」
「はん、なんなら敬称もなしにしてあだ名とかで呼んだげよっか」
「なんで若干怒ってんだよ？　しかもあだ名呼びかよ」
「うんあだ名で。読みを変えて、あと字面の印象から連想して……
……そう、リンゴ、とか」

「紅林吾朗。たしかにそれっぽい字面をしているね。これからリンゴでいいんじゃないかい？」
「だってさ、リンゴ」
「呼び捨てかよ」
「リンゴさん」
「いや敬称つければいいってもんじゃねぇよ。果物みたいで、なんか女性名っぽいだろうが」
　言い返せば、まほらは膨れ面で一人ずんずんと先を歩いて行ってしまう。なにを怒っているのか皆目見当がつかず、弱り顔で三月を見る紅林だが、彼女も特にまほらの行動を理解できているわけではないらしく首を横に振った。
「ま、あの年頃の子はよくわからないもんだよ」
「ホントになあ。比べて、あのくらいの歳のお前はだいぶ自分の才能に酔ってた感が否めない、実にわかりやすい子供だったぜ」
「やめなさい昔のこと言うのは。あれは小さい頃に特有の万能感という奴で、私は別に酔ってなどいなかったよ」
「得意げに自分の専門分野の研究について四歳も年下の俺に講釈垂れてた奴が自己陶酔していなかったと？」
「若気の至りだよ反省はしているってば」
「そうかよ。って、あいつ足速いな。いつの間にか距離空けられてるぞ」
　二人が話している間にも、まほらはモールの中を一人突っ走っていく。もしも見失ってアナウンスに頼るようなことになっては、自分たちもまほらも非常に気まずくなるだろうこと請け合いなので、遠くなっていく背中を追いかけはじめた。
　すばしこい、小さな背を見つめていると、先ほどの話題も手伝ってかだいぶ昔のことが思い出される。思えばその頃は、追いかけっこのような子供らしい遊びはほとんどしなかった。
　赤貧の養育施設から、偽術研究機関であるＡＣＯの内部組織に拾われ、同年代の少年少女と教育を受けたあの頃。生活の面倒を見る

代わりに預かった子供を優秀な人材として育て上げる、という名目で動いていたＡＣＯにより、同級の人間も、紅林も、国家偽術師としての資格まで取得し全てがうまく進んでいたあの頃。
あの頃に遊んだ、数少ない記憶。と、なんとなくそれを思い出していた今の自分が、あの頃とは感覚も、思いも、すっかり変わってしまっているということに考えが行き着く。当時を思い出そうにも、感覚がそこから前へ戻れない。過去の自分と今の自分との間にあるなんらかの隔たりが、かつての感覚と思いとの同一を許さず、乖離させている。
だがかぶりを振ってその事実を払いのけ、自分の目的を見つめ直す。そう、己が立っていた、かつてそこにあった、スタートラインに立ち戻るのだ。
四級地方偽術師にまで身を落としてしまった自分の全てを取り戻すため、なにをしてでも世に自分のことを認めさせる。そのために――まほらの？バレッジ？の魔力を用いて、自ら考案した大規模な実験により、？四地の発案にすぎない？と学会が知っても無視できないほどの成果を収めなくてはならない。
逃がしてなるものか、と紅林の足には自然、力がこもった。

＋

「吾朗、明日は街中を少し見て回ってから、帰ろうか」
言って、正面にてふかふかした一人用のソファに腰かけた三月はグラスを傾け、中身である琥珀色の液体をゆっくりと嚥下した。室内には小さな音量でテレビからニュースキャスターの声が流れており、三月越しに向こうを紅林が見やると、夜景というには少々高度の低い景観が視線を迎え入れる。ぱちぱちとまたたく光が散らばった夜闇は彼方まで連なっていて、その光が途切れた先に、自分たちの住まう八尾があるのだろう、と目星をつけた。
「……吾朗？　どうしたんだい。あんた、夜景などに興味がある人

だったかな」
「たとえそうだとしても、やっすいビジネスホテルの六階から見える景色じゃ食指動かねえよ」
夜の街から視線を切ると、黒く室内を反射する窓ガラスに己の顔が映っていた。むすっとした顔で瓶のジンジャーエールを構えており、眉根に寄った皺がとれない。紅林が自分で自分の顔を眺めていたのを見て取ったのか、三月はくすくすと笑って窓の方を振り返った。
「そうかい。なら今からでも隣のホテルの最上階、最高級スイートルームをとって何万ドルかはするだろう夜景眺望とフランス料理フルコースで、遅めの豪華ディナーと洒落こもうか？」
「お前、そんな成金趣味の爆発みたいな真似したら、軽蔑するぞ」
蔑んだ目を向ければ三月は取り乱した様子でブランデーをこぼしてしまい、慎重にテーブルの上にグラスを置き直して中身を継ぎ足してから、「しないよそんなこと、冗談が通じないね」と片目を閉じて嘆息した。並べるように、紅林も短く息を吐く。笑ったのかもしれなかった。
「お前実現できる財力ありそうだから怖ぇんだよ」
「そりゃ、できなくはないけどね。でもそういうお金の使い方が趣味なのであれば、なにも好き好んで教授のボロ屋敷に住んで安酒で晩酌なんてしていないよ」
「だろうな。ただ、住みかとかに頓着しないのは、まあお前の生活見てればわかるんだが」
つぶやいて紅林は、自分と同様にただの蔵書室と化していて生活・娯楽スペースとしての用を成していない三月の部屋を思い返した。散らかった部屋は電化製品すら本に埋まっており、三月は趣味のテレビゲームなどをやる際には、わざわざ律希の部屋に出向いているのである。
「でも酒は高い奴とかの方がうまいんじゃないのか？」
「……ばかだね。誰と飲むかの方が、大事なんだよ」

「ああ、高い酒は酒呑み仲間と、ってことか」
「ばか、しね」
酒が入っているせいか、物言いはストレートだった。すわった目で睨まれて、紅林は言い返そうとした言葉を封殺されてしまう。その時脇腹が痛んで、紅林は顔をしかめた。
「意味わかんねぇ……、昼の渡良瀬といいお前といい、どこでキレるのかさっぱりだ」
「ふん、それがわかるのなら今頃あんたはこんなとこにいやしないよ」
三月はグラスを空けて溜め息を放ち、つっと指先で掛け時計を示した。紅林はああ、とうなずきポケットから錠剤を取り出すと、ジンジャーエールで喉の奥に流し込み、脇腹をさすった。
何の気なしに横のテレビを見ると、午前四時のニュースが映っていた。近々日本で開催される、国際偽術サミットの会議内容などについての続報である。
「ここ数日、この話題ばっかだな」
「現場の意見はあまり反映されないし、いつも通り互いの地脈断層大地への不可侵の確認とか研究についての牽制で終わると思うけれどね……ただ、日本は六年前の大竜事変のせいで一部の地脈断層大地は魔力枯渇が深刻な問題だから、今回も？技術交換？なんて言葉を掲げてアメリカとかに偽術師を派遣しようとするだろうよ」
「不可侵条約を批准してるから無理だろ。だいたいその大竜事変自体、日本が魔術に匹敵する大量破壊偽術なんぞを開発しようとして失敗した結果だと疑われてるらしいしな」
「ひどい嫌疑だよ。八日前でやっと六年、それぞれの分野では各国にひけをとらない発達を見せたけれど、全部を統合した総合偽術分野では、未だに大竜事変の時からの遅れを引きずっているというのに。それにしても各地で魔力枯渇を起こすほどのあの事件は、一体なんだったのかな」
「さあな。案外本当に、魔術を使った奴がいたのかもしれないぜ。

大戦前みたく、魔力燃費がクソ高ぇ代わりに莫大な力を発揮できるような技をな」
「仮に使える人間が居たのだとしても、限られた資源である魔力をそんな風にばかすか使われたら、私たちはたまったものじゃないよ」
「まったくだ」
グラスを置いて、チーズ鱈を口に運びながら三月はテレビを消した。夜と朝の隙間に落としこまれたように、室内を無音が満たす。静まった部屋の中、互いの息遣いが眠気を催す。
あくびをかました紅林はふっと聴力を壁の向こうへ通し、隣の部屋で眠っているはずのまほらに動きが無いかを確かめた。安いビジネスホテルなので、壁もさほど厚くはない。話声くらいは聞こえるはずだ。もっとも、壁越しでは内容までは、掴めないだろうが。
ともあれ、耳を澄ましても隣からはまったく音がしなかった。
「……寝てるっぽいな」
「逃げるとは思わないけどね。スパイであっても、そうでなくても」
「俺もそう思ってるよ。だが逃げる気がなくとも、ここから連れ出される可能性はある」
「連れ出されなくとも、スパイなら一人の時に連絡を取るかもしれないしね。相手グループか、まほらか。私たちが泳がせたのは、どっちなのかな」
紅林と三月は片耳を塞いでいたイヤホンで、隣室の音を拾う。昼にショッピングをしている最中に、三月の荷物に紛れ込ませて買った盗聴器だ。
しかし物音ひとつ聞こえない。異常はないな、とまたあくびをかまして、紅林はソファに深くもたれかかってベージュの中に点々と黒いしみを含んだ天井を見上げる。瞳には、密度は濃いが鈍い光が宿っていた。
「渡良瀬自身がバレッジを違法な組織によって手に入れた人物だったり、違法組織自体からのスパイと思しき行動を見せたりしたなら、ここでどうにかして俺とお前で倒す。……お前と俺が組めば、室内

戦闘でまず負けはないだろ。で、次にＡＣＯからの脱走者で、バレッジの無断持ち出しと偽術研究の持ち出しなどが認められる逃亡犯だった場合は、その場で奴を逃がして俺が被害者だと装うから、その隙にお前が追跡してくれ。お前の偽術ならできるだろ？」
「まほらが逃亡より戦闘を選んで、追っ手を殺そうとした場合はどうするんだい」
「殺傷手段と追っ手の状態を確認してのち、俺が人質のフリして取り入り、一時的に逃亡幇助して共犯になる。お前はＡＣＯの追っ手の方見といてくれ、んで渡良瀬に俺と二人して脅されてたと言い張ってくれ。相手がどっかの第三勢力の場合も対処は同じだ」
「……わかったよ。しかし、大事になってきたものだね」
「追っ手は環境管理局じゃない。だがそれ以上の情報がない。早めにこっちから動いて相手の正体見極めとかないと対策が講じにくいし、渡良瀬に恩を売りつけて？地脈反応転位実験？に協力させることもできないだろうからな」
　以前からこれは実現可能だ、と同僚である三月や山井に提唱していたが、ここの偽術師の魔力キャパシティでは不可能だと捨て置いた解釈。紅林はここへきて、その実験を成功させようと目論んでいた。
「地脈の魔力をまほらの魔力を触媒に引っ張り上げて、お前と山井と俺の偽術を使えば、できるはずだ。状態および情報を維持した魔力粒子を、わずかだが未来に送ることが」
「状態を完全に保持して、か。宇宙は常に無秩序を目指しているのに、本当にできるのかな」
「やらなきゃわかんねぇさ。あと、四地（おれ）が頼んでも準備してくれないだろうから、お前の伝言だっつって三国（山井）に頼んどいたぜ。ま、追っ手がＡＣＯでなけりゃ、明日中には終わるだろ。逆に昨日追い払った連中がＡＣＯでそいつらから報告がいってたら、研究所の方にも追っ手が来て準備も止められる。昨日追い払う時に、俺が偽術使っちまったからな。第三研究所の所員だとは疑われてるだろうし、

ゆえに第三で奇妙な動きがあったら普通止める」
　もっとも、その時はまだまほらを連れ帰るつもりなど毛頭なく、むしろ逃げられてしまったので、単なる通行人の偽術師だと判断されているかもしれないが。状況は、考えられるだけ考えておいた方がいいと紅林は思っていた。実験と同じである。
「今日ＡＣＯからの追っ手だとわかった場合はこのまま逃げて、第二研究所の方にいる知り合いをあたるわ。で、問題は第二んとこの地脈断層大地のパスだが、お前パスくらい作れるって豪語してたよな」
「自分とこのはともかく、一、二回しか行ったことがない第二のパスを作るというのは少々難しいよ。正門から入ることは考えず、まほらがしたように斜面を下りるしかないと思うな」
「お前の偽術はともかく、今の俺の偽術はあの崖をクリアできるもんじゃないんだよ」
「でもまほら自身はやり遂げたんだろう？　ということはあの子の偽術はそういうこともできるということではないのかな。逃げるためには必要だ、と言えば使ってくれると思うよ……けれど、いいのかい吾朗」
「なにがだ」
「今さらだけれど、これは法に触れる行いだよ」
「法が、社会が、俺を助けてくれたことはねぇよ。いつだって社会は結果出したもん勝ちだ。だいたいあっちも夜中に人攫いやってたんだ、後ろ暗いのはお互い様なんだろきっと」
「……そう」
　悲しげに目を伏せて、三月は何も言わなかった。紅林はジンジャーエールに口をつけて、眼前の旧友の表情の意図を考え込んだが、さっぱり推測できなかった。
　それにしても、耳には雑音ひとつ聞こえない。今晩は状況の進展なしか、と思い、空になったジンジャーエールの瓶を置いて紅林は立ち上がる。

「生姜が切れた。買ってくる」
「いってらっしゃい」
目をそらしたまま手を振る三月に見送られながら扉を抜けて、古めかしい自動販売機が置かれていたホールへ向かおうと、右を向く。念のため、なにかあったらすぐ戻って対応できるように、イヤホンの音量はあげておいた。
と、長すぎず短すぎない廊下の中間に位置する現在地から、まほらの部屋と反対の方向、すなわち右がエレベーターホールだったのだが。
なんとなく、そう、なんとなくとしか形容できない不可思議な感覚にとらわれて、紅林は後ろを向いた。誰もいない廊下が向こうまで静かにたたずんでおり、すぐそこには当然、まほらの部屋の扉がある。
違和感も、そこにある。
「……？」
二秒ほど凝視して、気付いた。ドアノブの形状が、おかしい。たった今、後ろ手に閉めたドアノブはなめらかな半球状の握りだったはずだが、まほらの部屋のドアノブはへこまされたように変形している……それも、尋常でない崩れ方だ。無理やりに破壊したとしか思えない、異常な形状だ。
何の物音もしなかったというのに、なぜ。
否。物音が、し無さ過ぎるのだ。
「おい、まさか」
ワークコートの裾を翻し、紅林は鍵の用を成さなくなったドアノブを回して室内に踏み入る。だが扉は途中でつっかえて、首を差しこむほどの隙間しか開かなかった。ドアチェーンをかけられているのかと疑ったが、それらしきものは見当たらない。にもかかわらず、扉は頑として行く手を阻み、鬱陶しさを覚えた紅林は体当たりで扉を叩き壊した。肩が痛み、蝶番が跳ねとび、それが足下に落ちるまでに室内を見渡す。薄暗く照明の落とされた室内で、うごめくのは

大きな影だった。
侵入者は果たして、そこにいた。ベッドの傍らに立ち、暴れるまほらを肩に担いでいる。濃紺のスーツをまとう背丈は三月と変わりない程度だろうが、大柄で筋肉を帯びた体型は壁のごとき印象を与えてくる。頭髪はサイドを刈り込んで襟足だけを短く一つに束ねており、面長の相貌の中紅林を見る目は、冴えた水面の月を思わせる冷淡な感情を映していた。
憂いというよりは、呆れ。嘲弄。明らかに、格下へ向ける目だった。
「ちっ、なんだよお前、嫌な目しやがって」
なんであれ、まほらを攫おうとしているには違いない。目線が気に入らないことも相まって紅林は意気込み、一歩相手に向かって踏み出す。しかし男は微動だにせず、なにか行った様子は感じられない。
だが紅林は、自分の腕が前方の空間に弾かれるのを見た。
「ってっ……な、なんだ？」
奇妙な事態に驚きつつも、こういう時の対処法は身体がしかと覚えていた。
空間になにかありそうならば？空間把握？で前方を確認する。するとそこには、魔力の塊が停滞していた。おそらくは、まほらを攫おうとしているあの男が仕掛けた偽術である。そう思った矢先に、目の前の魔力は消失した。男の双眸が、一層厳しく紅林へ視線を突き刺す。
「その程度か、紅林。堕ちたな」
いきなり名指しで、責めるような言葉が飛び出したことに焦りを覚えながらも、紅林は相手の動きに注意し続ける。音も無くドアノブを破壊して部屋に侵入したことといい、圧倒的な威圧感といい、気を抜いて相対してよい相手でないことは確かだった。
なおも続けていた？空間把握？が男を捉える。こいつも、常人を遥かに超えた魔力量の持ち主であることが理解できた。ともすれば

まほらの魔力に覆い隠されてしまいそうにも見えるが、それはまほらの？バレッジ？の許容量が異常なだけである。
男の魔力は、どこか見慣れた量を示している。
「なんの騒ぎだい、吾朗。問題発生かい」
油断なく隙をうかがう構えをとっていた紅林の背後で、三月が警戒心を露わにした声音を発した。援軍の到来に安堵しつつも、振り返ることなくうなずいて応じる。と、そこで眼前の男の魔力量に思い当たるところがあった。
「三月……そうか。こいつ、お前と同程度の魔力を持ってるんだ」
「一国の私と同程度？」
「ああ、バレッジ持ちで間違いない」
部屋の中をのぞきこんだ三月は、男の姿を認めると？空間把握？を行ったと見えた。すると男は暗がりから、廊下から漏れ注ぐ光に歩み寄り、顔立ちがはっきりと見えるようになる。鼻筋の通った、色の白い男だった。
「ん？　吾朗、この男」
三月がなにか気付き、紅林に確認を取ろうと肩を叩く。その反応に、三月を見つめ返した男は不敵な笑みを浮かべ。その表情に、紅林は動揺と既視感を覚える。
一国と同程度の魔力量を誇るバレッジと、皮肉るように、頬を歪める笑い方。見覚えのある仕草と、三月が自分に確認を取ろうとした事実とが合わさり、ふっと記憶の中の影と目の前の男とが重なる。ＡＣＯの内部組織で、共に教育システムを受けた学徒。
「……お前、佐野（さの）？」
「ようやく思い出したか、相変わらずすっとぼけた男だ。しかし……寝ぼけすぎにもほどがあるだろう、紅林。？空間把握？に至るのが遅すぎる上、構えも思考も緩みきっているぞ、お前」
まだ暴れていたまほらを抑えることがいい加減面倒に思ったのか、後ろのベッドに下ろしてから、佐野潔史（さのきよし）は腕を組んで紅林を睨めつけた。品定めするような、価値を見極めるような嫌な目である。

「ＡＣＯを出奔して六年、如月三月に拾われ二年。大竜の第三で研究員を務めているとは耳にしていたが……うわさ通り、堕ちたものだ。かつてＡＣＯのトップをして稀代の麒麟児とまで呼ばわしめたお前だが、今や見る影もないと言わざるを得んほどに、落ちぶれたな」
「んだと、テメエ。再会して早々に口の悪ぃ奴だぜ、一見しただけでなにがわかるってんだ」
「わかる。あまりにも弱くなりすぎているぞ、お前は。如月も幾分衰えが見られるようだが、それにしたところでお前ほどではない」
「うるせぇ。諸事情あって弱体化中なんだよ」
目を逸らした紅林に追い打ちをかけるように、眉根を寄せた佐野が言葉を次ぐ。
「まさかお前は、バレッジを切除されたことを言っているのか？俺が指摘する弱くなった、ということがそこを指していると思っているのならそれは違うと訂正しておくぞ、紅林。俺は総合的な評価を下しているのだ。魔力の多寡のみではない。状況判断能力、即時対応能力、身のこなし、気迫。お前はどれも四年前より遥かに衰えている」
「必要、なかったからだ」
「そうだな。四地に身を落としたお前には、一国として俺たちが研究成果を守護すべく最低限身につけるべきだった戦闘能力も、さして必要は無いのだろう」
琴線に触れるワードが出てきたことで、紅林は言葉に詰まる。浮いていた身体がようよう落ち着いたまほらは場に流れる険悪な雰囲気に目を白黒させており、逃げ出そうともせずに事態を傍観していた。空気に、呑まれていた。
「だが四地となって以降、研究成果も他人頼りでさほど真新しくもない。これを落ちぶれたと呼ばずしてなんとする？　しかも挙句の果てにＭ２プランの実行者を頼りとして実験を行わんとするとは……ああ、これなら落ちぶれたと呼ぶ他に、滑稽と呼んでもいいかも

しれんな」
「笑ってんな。つーか、やっぱ実験準備のことバレてんのかよ」
「M2プランに関わる実験なのでな、当然停止命令が出ている。残念だったな、紅林」
挑発する佐野のセリフに苛立ちを隠しきれなくなりそうな紅林だったが、M2プランという単語が出るたび、身をすくませているまほらに気がつく。なにか知っているのだろうか、と疑問符を浮かべたような紅林の表情を見て取ったのか、佐野は怪訝な表情を浮かべる。
「……なんだ、お前たち。亘理から、なにも聞いていないというのか？」
「ああ？　誰だよ、亘理って」
「亘理（わたり）、真帆（まほ）。今そこで震えている、M2プランの実行者だ。……なんだ？　おいお前たち、まさか本当に、M2プランの内容もなにも知らず実験の準備を進めていたと？」
「俺たちがなにか知ってたら、準備しなかったかもしれないのか？」
紅林が疑問に疑問を返し続けると、わずかな間をおいて、佐野はさらに問うた。
「あの実験、提案したのはお前か」
「だったらなんだよ」
「実験内容は、魔力粒子を数秒先の未来へ状態と情報を固定したまま送るというものか」
「……よくわかるな。まあ、所員の偽術とか把握すれば想定できるか。そうだよ、ごく短いが地脈反応の転位による時空転移実験だ。かつての魔術に近づける新しい偽術として、成果を報告しようと思ってた。野に下った六年前から温めてたプランだぜ」
「そうか……そうか。ああ、なるほど。細部はわからんが、確かに可能かもしれないな」
合点がいったという表情で、佐野は大仰にうなずく。今度は紅林が小馬鹿にしたような笑みを湛えて、佐野を見返した。紅林の顔と

対照的な感情をあらわにし、苦々しげに佐野は目を細め、剥きだした犬歯の隙間から、ぼそりと言葉を吐いた。
「無駄と無意味に過ぎる時間を過ごしたな、紅林」
「んだよ佐野、負け惜しみかなんかか」
「違う。その実験ならば――――六年前に実行済みだ」
「……はァ？」
「そしてつい先日、終了した。無論実験結果は、成功……」
耳から入った言葉を理解するに時間がかかりすぎ、紅林はほとんど空気を吐くだけで、喉を震わすことすらできなかった。呆れと嘲弄ばかりを示す佐野の表情も、さすがにこの時ばかりは同じ研究者として同情の念が湧いたのか、憐憫の情すら垣間見られる顔色を表す。
「仮に亘理を用いて成功させ、論文や実験記録を提出したところで、受理されることは永劫有り得ん。俺が先ほどから言うＭ２プランこそが、正にその実験だったからだ」
「そ、んなの……はっ？　え？　ま、待てよ待て、ちょい待て。そんな実験の話、聞いたことねぇよ」
「終了までごく一部の他に漏らすことも許されない機密事項だったそうだ。俺も先日、終了との報告を受けた上司から聞いたばかりだ。現在もまだ、緘口令が布かれている」
「じゃあ、そんなら、六年かけたのも」
「無駄だった。六年というのなら、はじまりから詰んでいたのだ、紅林」
紅林は膝に力が入らなくなり、かたかたと揺れる身体を横の壁にもたせかけ、虚無感が胸を満たすという矛盾した感覚に陥った。己の積み重ねた歳月が崩れ去る瞬間を知覚して、心が瓦解する音が響いた。ＡＣＯを離れて後、生活のために働かねばならず研究をする暇など無くなりながらも、時間と体力を削って磨いてきた解釈が、遂に虚空へ掻き消えた。
「……その解釈を証明することに精魂傾け骨身を削ってきたのか、

お前は。滑稽と呼んだ非礼は詫びよう、今のお前はひたすらに、哀れなだけだ」
　周囲の声もほとんど聞こえないほどに、己の内に埋没していく。精神的なダメージが測り知れず、紅林は顔をうつむかせた。最後に視界に入ったのは、ベッドの上から手を伸ばし、痛苦と悲嘆に暮れたような顔をしているまほらだったが、もはや彼女のことを考える余裕もない。
　代わりに、三月が声をかけた。
「まほら……いや、亘理真帆？　きみ、M2プランとかいう言葉に反応してたということは、本当は記憶喪失などではなかったんだね？」
「そ、それは、」
「やむを得ん事情あってのことだ、あまり追い詰めるような語調を使うことはよせ、如月」
「佐野、あんたもあんただよ。事情はよくわからないけれど、こんな明け方に襲撃するような真似して」
「そちらも、やむを得ん事情あってのことだ。お前にも詫びておこう、すまなかったな」
　組んでいた腕を解き、わずかだが頭を下げる。紅林の横に進み出ていた三月はなにやら対応に困った顔をしていたが――次の瞬間に、目を見開く。
「詫びのついでだが」
　背筋を正すと同時に懐に手をいれると、佐野は白銀に煌めくナイフを取り出す。
「死んでおけ、お前たち」
　慣れた動きで二歩の間合いを詰め、素早い挙動で下から上へ、紅林の胸を狙って突き込む。すかさず三月が首根をつかんで後ろへ引っ張り、かろうじて切っ先は紅林のワイシャツを切り裂くに留まった。
「外したか」

「佐野、あんたなにをっ」
「言っただろう、現在もまだ、緘口令が布かれていると。なにも知らずM2プランを組み立ててしまうような連中は、生かしておけんのだ」
「……いや、詳細はあんたが口滑らしたんでしょうが」
「どちらでも同じことだ」
再度身構え、小さく横薙ぎに引き斬る。まほらが叫び声をあげ、高いその音が途切れるまでに、三月は臨戦態勢に入る。きっと佐野を見据えて威嚇した後、己の足下に崩れた紅林を見る。
「吾朗、引いていて」
「は、あっ！？」
殺されかけた事実により、やっと意識が戻ってきた紅林だが、三月が偽術を使ったため途端に後ろへすっ飛び、廊下へ転がった。壁に突進してしまい痛む腰を押さえようと立ち膝になろうとしたが、その前に三月がナイフをかわしつつ、目配せして右拳を握る。
見覚えのある所作である。
かつて三月が紅林と戦闘で組む際に用いていた、合図だった。このことで戦いの場となってしまった事実が、紅林の脳内に沁み渡る。呆けている場合ではないと脳を覚醒させ、認識を加速させ、砕かれた精神をなんとか戦闘可能な状態へ持ちこまなければと心中で己を叱咤する。
死ねばそれで、今度こそ本当に終わりなのだ。六年がふいになってしまったとて、人生が即座に幕を下ろすわけではない。研究とは、先んじることも大事であるが……続けることにも、意味がある。研究者にとっては停滞こそが死なのだ。であるならば、自分はここで死ねるか？　死ねるはずはない。
自分の六年間の根幹を揺るがす佐野の発言も、まほらが嘘をついていたことも、ひとまず意識の外へ。泣き叫びそうな心中を押し潰して、冷静に生き残る策のみを思考する機構へと、作りかえる。三月と組んだ、呼吸を合わせた機構へ。

互いの意図を理解し――というよりも、互いの即時対応能力を信じ、紅林は計算を開始した。座標は扉の奥、ナイフを振りかざす佐野の背後から、まほらがへたりこむベッドまでの空間。そこへ魔力を拡散させ、掌握し、術式を展開した。

空間伸縮――？縮地（カットバック）？。

5　M2プランの胎動（後書き）

戦闘開始。

6　襲撃の終焉と回顧録の面影

空間伸縮――？縮地（カットバック）？。その空間が、まるで地を縮めるかのごとく、圧縮される。二メートル弱の空間の奥行きが十センチにまで押し込められ、少し手を伸ばせば三月もまほらに触れられるかもしれないほどだ。

目配せの後に右拳を握る、というのが、この偽術を使えという合図だったのである。

「でかした吾朗！」

三月が？空間把握？によりその空間の圧縮を察し、続けざまに発動するは彼女の偽術、

「――？空間傾倒？っ！」

室内に魔力が満たされ、三月の術式が行き渡ると、ふわり、まほらを載せたまま、ベッドが浮き上がる。指定した空間の重力方向を自在に傾け操るこの偽術で、先ほど三月は紅林の立つ位置から廊下の方向へと重力を働かせ、無理やり後退させたのである。そして今は、室内全ての範囲における重力を、廊下の方へ傾けていた。

すぐに彼女自身は廊下へとバックステップで逃げ出しつつ、扉を閉める。佐野は背後のベッドや家具との距離を潰された状態であるため、間をおかずなだれ込んできた家具に背中を襲われた。その身体も宙に浮き、伸ばした手が扉に触れる前に、勢いよく扉は閉じる。次いで鈍く、大きく重いノックの音が廊下に響いた。三月は紅林の方を向き、エレベーターホールを指差す。

「よし今のうちに地下の駐車場に、」

「ふん、今とはどの今だ」

途端に声がして扉が開き、佐野は特に怪我を負った様子もなく出てきた。まほらの無事を確認でもしているのか、後ろを振り返りながら、だ。そして廊下に足を下ろそうとした。

「……ッは！　今は、今だよ！」
が、その足は床に着くことなくふわりと浮いたまま。空中で中途半端な体勢で浮遊して、そのまま廊下の奥へと落ちていく。
三月は佐野が出てくることを見越して、廊下の奥へ向け術式を再構成したのだ。偽術は、効果範囲こそ術師の魔力次第で広くとることができるものの、複数個所に同時設置することはまずできない上、基本的に視界の中でしか効果を発揮しないのだ。
「落ちなさい、佐野！」
紅林たちから見ると彼方へ吹っ飛んでいるようにしか見えないが、その実落下し続けている佐野は、自分の状況を理解して顔をしかめたものの二部屋分の落下の途中でドアノブをつかんで、ぶら下がった。次いで、逆手に構えたナイフを扉に突き立てると懸垂の要領で身体を持ち上げ、七メートルほど離れた三月を睨みつける。
「小癪な真似を……待っていろ、如月」
今そちらへ向かう。
つぶやき、背後の虚空へと、足を投げ出した。
「は、あ？」
我知らず変な声をあげてしまった紅林は、しかし困惑から驚愕へと表情を塗りかえられた。
佐野は何もない空間に立ちつくし、首を上向け紅林たちを睨みつつ、脚を屈伸させて跳躍の構えを見せていた。そして跳ぶ。何も無い空間にて脚を折り曲げ跳躍、何も無い空間にて着地、を繰り返し、重力に逆らいながら進んでくる。紅林が空間把握を使うと、魔力の塊が、佐野の足下に着地から跳躍までの間だけ存在しているのがわかった。
おそらくはそれが、佐野の偽術なのだ。しかし空間把握はあくまでも魔力の有無を観測するためだけの偽術であるため、これ以上の詳細はわからない。
「空間に足場を作る偽術、もしくは空間に入れないようにする偽術か！」

後者であるなら、先ほど室内の家具が空間傾倒により襲いかかったにもかかわらず無傷でいられた理由がわかる。最初紅林が部屋に入ろうとした際に扉の向こうを塞いでいたのも、この偽術だったのだと思われた。

そうこうしている内に素早い跳躍を連続させて走るような速度で近づく佐野は、右手のナイフを小さな動きで投擲した。距離が近いこともあり、三月はかわし切れない位置だった。

これに対し？目配せして左手の五指を開く？という合図を三月が行うより早く、紅林は空間伸縮を発動させる。？外延（エクステンション）？。十センチの距離が引き伸ばされ五メートルの奥行きを持ち、確実に届くタイミングであったにもかかわらず、ナイフは五メートル余分に空を走らされたため失速した。傍から見ていると、ある空間に侵入した途端にナイフの動きが遅くなったと映る。

三月はサイドステップで辛くもこれを避けると、紅林に呼びかけた。

「吾朗、もう一度だよ！」

三月も佐野の偽術の性質に気付いたのか再度術式を構成し直し、紅林に向かって右拳を握ると、その手を後ろへ引いてみせる。重力方向を、今度は自分たちの方へ傾けるという合図だ。紅林は急いで？縮地？で彼女と佐野の間の距離を縮めた。軋む空間の向こうから、重力方向の変化で体勢を崩した佐野が近付く。相手が倒れ込む力も利用し、三月は渾身の右掌でカウンターを決めようとした。

「――浅い、間抜けが」

佐野の一声と共に、魔力の塊が現れる。厚さは三センチにも満たないが、瞬時に五十センチ四方の壁を成し、あと少しで佐野の顔面を捉えたはずの三月のカウンターを弾く。空中で打撃を跳ね返しただけとは思えない、硬質で乾いた音が響いた。掌を痛めたのか、三月の小さな悲鳴が続く。

連なるは、迎撃の音。佐野はその壁に右手をついて着地しており、下半身が落ちてくる勢いを載せて壁の下から脇腹めがけて左中段回

し蹴りを繰り出した。とっさに右肘を下に落として三月は防御したが、重い一撃によろめいてしまい壁にもたれかかる。今更ながら、容易い相手ではないということを思い知ったのか、三月は引きつった笑みを浮かべる。

続くは、追撃の音。左足が接地すると同時に魔力の壁を解除し、ようやく通常重力下の空間へ戻った佐野は、壁に追い込まれた三月に左のフックを打ちこもうと拳で風切る。けれど三月は、なおも苦しげに、笑った。佐野は三月の表情を訝しみ、

「如月、貴様」

そこで、気付いたらしい。

――三月の身体の陰に居たため一瞬見失った紅林が、己の視界にいないということを。

佐野が首のみ振り向くと、紅林が足を振り上げていた。一瞬の死角が作った好機を逃すことなく、紅林は？縮地？で三月と佐野の脇にある空間を縮め、一歩で佐野の背後に回っていたのだ。もちろんそこは、三月の空間傾倒により重力方向が変化させられたままである。

「喰らえよ」

重力による落下の力も加わった紅林の横蹴りが、佐野の鳩尾を狙う。同時に、佐野の正面には三月が移動する。どちらかを壁で防がれても、どちらかが一撃をいれることができるように。

両側から挟み打つ、まさに必中の挟撃だった。

だが。

「浅知恵だ」

踵を軸に半回転した佐野の偽術により、二人の攻撃は、どちらも弾かれる。しかも紅林は重力落下の勢いを殺せず壁にぶち当たってバウンドし、肺腑に空気が詰まったような嫌な感覚と同時に吐き気を覚え、吹っ飛んだ先で三月の斜め前に転がって激しく咳こんだ。

かろうじて紅林が空間把握を使えば、魔力の壁は半球状に佐野の周囲を覆っていた。

「……そ、そんな風にも、張れる、のか……」
「足場と為すのは応用のひとつに過ぎん。形態も状況に応じて使い分ける。勝手な憶測で高を括り仕損じるとは、やはり堕ちたな紅林」
言い返そうとして余計に紅林は咳こみ、その隙に蹴られそうになったが三月が引っ張り、自分の背後へ移動させる。紅林は胸を押さえつつ、落ちていたナイフを拾い立ち上がろうとする。が、妙にそれが軽く感じられた。
すると、自分を引っ張るためにほとんど佐野に背を向けてしまっていた三月が、紅林の目を見てから、自分たちの部屋の扉を見て、また佐野に向き直った。
「……まずい状況になってしまったみたいだね。まさか、あんたがここまで強くなっているとは思いもしなかったよ」
「なめるな。お前らと共に学んでいたあの頃ならばいざ知らず、今はお前と同じ一国の身だぞ、俺は。そうやすやすと切り抜けることができると考えてもらっては困る」
憮然とした態度で以て対峙する佐野は、地面に足を擦りつけてじっとりと間を詰める。話す間も、三月は左半身の構えを取るフリをして背に隠した右手で、部屋の扉を指していた。紅林は、なんとなく意図を理解する。
「あっそう……ああそう。でもいいのかな？　あんたの仕事は私たちを殺害することで時空干渉実験を阻止することもそうだろうけど。わざわざ奪いに来たあの子の安全の確保も、仕事でしょう？」
「そうであれば、なんだというのだ」
徒手の左手を前に出して左半身となった佐野は、三月を睨む。
「だとしたらさ。あの部屋の奥行きって、三メートルはあったのではないかな？」
三月は片手を差し出すと、人差し指をまほらの部屋の方に向ける。意味がないと見えるその所作に、佐野の睨む目が、なにか感づいた色を孕んだ。なんとか立ち上がれた紅林はそろそろと弧を描くように移動し、自分たちの部屋の扉へと、さりげなく歩み寄った。

「……ねえ、佐野。無防備に落ちたら――」
三月は、己の左手にあるまほらの部屋を見た。佐野が部屋を出てくる際に、扉は開け放たれたままとなっていた。
「――打ちどころによっては、死ぬにも十分ではないかな？」
そしてまたも、物が床を引きずられる音が部屋の内より響く。きゃああ、とまほらの甲高い声が割れたガラスのように飛び散った。三月は部屋の奥、窓の方へ向けて重力を傾けたのだろう。下手すれば窓ガラスを突き破り、まほらが六階の高さから転落しかねない。舌打ちして魔力の壁を発動したらしい佐野は、一瞬部屋の中に気を取られた。
隙を見逃さず、紅林は自分たちの部屋の扉を開け、中へ逃げ込む。間をおかず奥の窓ガラスへ向けてナイフを投げつけ、蜘蛛の巣のごときひびを張り巡らせた。そしてベッドの上にあったバスローブをつかむと正面に掲げてクッションとし、体当たりでガラスを砕き、六階の高さから空中に身を投げだす。
一瞬の停滞、重力との競り合い。それに負けて紅林は落ち始める――――空へと。
後ろから追ってきた三月が空間傾倒で、重力方向を天に向けたのだ。そのまま四階上に昇り、屋上へ辿り着く。ガラスの破片とナイフはそのまま屋上に散らし、なんとか一息ついた。
「サンキュ、三月。ガラスとかナイフとか、地上に落とさなくて済んだな」
「ああ、そうだね」
「あとは早いとこ逃げねぇと。俺は魔力使いきっちまったし、また空間傾倒で隣のビルまで飛ぶか」
近場のビルで高さが同程度のものを探そうと辺りを見渡していると、紅林のボトムスの裾が引っ張られた。首をかしげて、紅林は手の主、三月を見下ろす。
「いや、それは……ちょっと、難しい、かもしれない」
「ああ？　どうし」

て、と繋いだ音は、ほとんどかすれて消えた。
足を崩してへたりこんだ三月の影に血が、舞い散る。背中側から右の脇腹を貫いているナイフが、切っ先から雫を落としていた。短く息を連ねている三月は、不思議そうに傷口を見て、次に紅林に目を向けた。痛みによるものか、瞳が潤んでいる。
「……は。おい三月、それ、」
「後ろから、佐野が投げた、みたいだよ……しかも的確に、バレッジを壊され、た、みたい」
ボトムスの裾を引く手が、震えた。紅林からも血の気が引く。
バレッジ。大容量魔力貯蔵装置であるそれは生産に多大なコストを要するため、ＡＣＯに認可を受けた第一級国家偽術師でもなければ身につけることのできない、数の限られた特殊な機械である。これを破壊するほどとは、いよいよ紅林と三月は危険視されているらしい。
用いることで研究の幅を広げることができる一方で、誰でも強力な偽術を扱えるようになってしまうことから悪用の危険にさらすわけにはいかないバレッジは、半年ごとの筆記試験と年間三回の研究論文受理、ならびに精神鑑定を受けてようやく取得できる。それでも盗難の危険が残るため、用心のためにＡＣＯは術師の右脇腹、体内へとバレッジを納めるのだ。
かつては紅林も、持っていた。しかしＡＣＯを抜けるにあたり摘出されてしまい、大容量の魔力を扱うことに慣れ切っていた身体は、日に四度、ごく狭い範囲でしか偽術を発動できないほどに弱体化した。これは本来人体や生物が持つ魔力量を、遥かに下回った数値と言える。
「……ったた……とに、かく。バレッジが、壊れたってことは。私も、もう偽術は使え、ない」
「そんな……」
「吾朗、非常階段から、逃げなさい。あいつらもすぐに、来るよ」
「んなことすりゃお前が死ぬぞ馬鹿。……おい三月、佐野はお前に

ナイフ刺さったのは、確認してるんだな」
「自分の投げたナイフに、手ごたえがあったかくらいは、わかってるだろうよ。仮にも、暗殺目的で、ＡＣＯが差し向けたん、だから」
「だったらお前が倒れてる可能性は考慮してるよな……」
周囲を見渡すと、紅林は干してあったシーツを乱暴に剥ぎ取り、丸めて三月に渡す。次いで自分の着ていたワークコートを脱ぐと、ボタンを留めて中にシーツを詰め込んだ。
「そんでシーツの余りで止血して……あとは、なるだけ出入り口から離れて、奥の柵の近く行け。この暗闇なら、一瞬見間違えてくれるだろ」
かんかんと素早く昇ってくる足音が聞こえた気がして、出入り口を向く。ドアの真上にはライトがあり、ドアノブの影を長く引き伸ばしていた。紅林は三月から離れる。離れてみると、柵の傍でコートを抱えてへたりこんだ三月は、一応、紅林と抱き合っているように見えなくもなかった。
「俺だと思って大事に抱えとけ」
「あ、あんたなに言って」
「こういうのは演技が大事だぜ。一流の演技は、無いもんが有るように見えるからな。……生き残るためだ、一秒でいいからあいつを誤魔化せ。それが俺だと思い込んで、あいつにも思い込ませて、騙しきれ」
離れた紅林は屈みこんで、バスローブ越しに手を伸ばし、ガラスの破片をまとめて拾い上げる。バスローブの中に包み込まれた破片はがちゃがちゃと耳障りな音を立てた。落ちていたナイフは口にくわえて、出入り口へ急ぐ。
いよいよ本当に、足音の響きが耳に届き始めた。左手にバスローブで作った袋を持ったまま、紅林は出入り口の傍にあった梯子をよじ登る。給水タンクの整備用に設えられているそこからなら、出入り口の上に位置するライトに手を伸ばすことができた。角度を調節したそれが佐野の目をくらますことを祈り、ガラスの破片が音を立

てないよう息を潜めていると、
がん、錆びたドアが軋んだ。
ドアが開かれ、佐野の左腕が見える。頭が出てくる。三月を視認した。おそらくは詰め物をしたコートも。そこまで確認できたところで、佐野がさらに動くより先に、紅林はバスローブの包みをほどいた。……頭上から接敵する可能性を、佐野はまったく考えていないわけではなかったのだろう。じゃら、と音がした瞬間に上を見たのが、その証拠だ。
だが空間を認識し、距離を捕捉し、偽術を発動させるよりは、落下するガラスの破片の方が早かった。細かいガラスの面と面と面と面とが、ライトの光を受けて輝く。
――偽術師は、目視するだけで物体の長さや大きさ、相手までの距離などを瞬時に認識できるよう特殊な訓練を受ける。それにより空間の情報を読み取り、術式の演算に当てはめるのだ。だから視界の範囲内でしか偽術は使用できず、複数個所へ同時に演算を働かせるのは難しい故、一度に一ヶ所にしか発動できない。
つまり目を潰せば、偽術の発動はほぼ不可能といっていいのだ。
ライトの光が乱反射したガラスの破片群により一瞬だが視力、距離感を封じられ、佐野は先ほどの魔力の壁を発動し損ねる。同時に頭上から飛びかかった紅林は、口にくわえたナイフを右手へ取り、首筋めがけて振るった。これで終わりだと、瞳を閉じかける。
「……――――っ！」
しかし、佐野の小脇へ抱えられ自分を見上げていたまほらを見て、動きが止まってしまった。ガラスの降り注ぐ中に彼女を置いてしまったことに、一瞬の戸惑いと躊躇が生まれる。
その一瞬の隙が、佐野のショートアッパーにより喰らい尽される。顎から左頬を抉るように打ち抜かれ、視界が明滅した。ほとんど受け身も取れず、佐野の身体にぶつかり、続けざまに腹部へ膝蹴りをもらって、階段を中ほどまで転がり落ちた。こみ上げる吐き気を堪えて上を見ると、ライトの光を背に佐野が進み出てくるところだっ

た。
「……偽術が使えないとなればすぐさま切り替え、その場の物のみで対応した点は評価する」
言葉を切るとナイフを左手に取りだし、投擲した。身をよじって紅林はかわしたが、背中に痛みを感じて、そこへ手を伸ばす。ナイフが、刺さっていた。かわされたら即座に紅林の背後へ壁を作り出し、ナイフを弾き返したのか。
「だが、たとえ俺を退けたところで、お前たちは最早戻る場所もない。研究の成果も発表はできん。すべて終わっている。足掻いたところで意味は無い」
「ちがう、まだだ、まだ終わってねえっ……！　ＡＣＯで認められないなら、外国逃げてでも研究を続けてやる！」
「だから、それは無意味だと言ったろう、紅林。仮にお前の言う実験ができたところでＡＣＯの研究はすでに実用段階での実験を終わらせているのだ。粒子の時空転移から出発したところで、実用化に追い付くまであと何年を要すると考えている」
「実用、だと。六年前の段階で、すでに――六年前？」
大竜事変が起きたのと、同じ年代である。
先ほどのニュースを見た際に紅林自身が語った通り、大竜事変の発生原因は日本で大量破壊偽術の研究が進められていたからだ、との見方が諸外国ではまかりとおっているのだが。
もしも、大量の魔力を消費し、時空に干渉する術、すなわち魔術に匹敵するような偽術が、本当に行われていたのだとしたら。大竜事変の原因は、六年前にまほらが関わったという実験ではないのか。
否――関わるどころか、まほらはその実験、Ｍ２プランの？実行者？だと佐野は語った。
だというのに大竜事変を知らず、地脈断層大地への不可侵条約なども知らず、けれど一級国家偽術師を遥かに上回るほどのバレッジを所持している事実。……紅林の考案していた実験は、魔力粒子の情報と状態とを固定して、未来へ送る実験である。

それを、実用化した実験だと、いうのなら。
「まほら、お前まさか」
大容量バレッジによる魔力を触媒に、地脈から汲み上げた大量の魔力を消費して、実行者たる彼女自身が六年後の未来、今現在へやって来たのだとしたら。ここ六年間のことには無知であるにもかかわらず、異常なほど偽術研究に詳しいことも合点がいく。
なにも言わず、まほらは逸らしていた目を紅林に合わせた。
「偽物じゃ、なくなっちゃった」
泣きそうな顔ではにかんで、まほらは紅林に語りかけた。唖然として見上げる紅林は、佐野の右腕に庇われるように陰に立つまほらが、いつかどこかの誰かの姿に重なるのを感じていた。
「わたし、本当に、本物に。真術師(まじゅつし)に、なっちゃったんだよ――リンゴ」

先刻呼ばれた時とはちがい、その呼び名は、目の前のまほらが言ったのではなく。頭の片隅にあった記憶の中の彼女が口にしたように、紅林には思われた。思い返した彼女の姿と今のまほら、もとい、亘理真帆の姿は、寸分違うこともない。あの日、出逢った時のまま。
紅林が、三月が、佐野が過ごした六年を飛び越えて、真帆はここにいるのだから。
「順当に、俺たちと同様に育っていれば、お前と同じくらいの歳だったろう。だがそうはならなかった。それこそそんな時間はなかった。なぜなら俺たちはＡＣＯ、対災厄機構だ。いずれ訪れる魔力枯渇とそれに付随する災厄、六十年前の大戦後に起きた文明停滞をまたぞろ起こすわけにはいかん」
佐野は真帆の視界を覆うように進み出て、紅林に言い放った。
ＡＣＯ――Ａｎｔｉ　Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ　の目的は？災厄？への対抗としての偽術発展にあるが、ここでいう災厄とは戦争のことではない。大戦で世界人口は二割ほ

ど減少したというが、そのほとんどは戦死者ではなく、魔術ありきで成り立っていた社会の崩壊がさまざまな分野へ波及した結果の死者である。

よって、魔術の代替品として偽術を研究するＡＣＯは同時に「程よい発展」を掲げており、偽術に頼り切らず他の分野を常に開拓し続け、徐々に偽術から離れていく姿勢を見せている。

そのはず、なのだが。

「ならなんで魔術師を作るようなプランをやってんだ。魔力枯渇の回避を目指すっていうなら、むしろ大竜事変が深刻な問題を作ってんだろうが」

「……ＡＣＯの計算では、もうこの世界は三十年後には魔力枯渇が始まるという」

「それも大竜事変のせいじゃねぇのか」

「六年前、Ｍ２プラン実行以前に算出された結果だ。大竜事変は関係ない。そこで、現状を維持すべく、ＣＴＣを探す計画として亘理の時空転移が行われた」

「ＣＴＣ？」

「Ｃｌｏｓｅｄ　ｔｉｍｅｌｉｋｅ　ｃｕｒｖｅ　時間的閉曲線の略称だ。時間はループ状になり未来の果ての向こうが過去へ行き着くという考えがある。それが事実であれば、強力に空間へ作用する偽術でワームホールを作り、過去に戻ることが可能だ。Ｍ２プランはその意味で、第一段階に過ぎない。時空転移が可能かを確かめただけなのだからな」

「じゃあ、ＡＣＯは、過去に戻ってなにをするんだ」

「現在の偽術と技術を伝え、革新的な発展を与えることで少しでも魔力枯渇を遅らせるつもりだ。本当ならば大戦中に戻り戦の愚かさを伝えるべきだろうが、一人の人間の力は脆弱というもの。声をあげても誰にも届かず、いいように魔術だけ利用されるだろう。故に亘理には今後も十年単位で未来へ飛び年代ごとの偽術を習得してもらい、最終的には今現在から六年前、つまりＭ２プランの実行直前

の時間軸へ回帰させ、大竜事変も無い新たな歴史を紡がせる」
災厄を防ぐ、救済者となる。そのように述べ、佐野はようよう一歩踏み出した。立ち上がって逃れようにも、階段を下りる道はすべて魔力の壁に阻まれており、紅林は動けない。佐野はゆっくりと追い詰める。諦念がじわじわと、紅林の脳内を蝕んだ。
「そのためには、M2プランを実行できてしまうお前たちが邪魔だ。あまつさえ、お前は外国に渡ってでも研究を続け亘理と同じ領域に至ろうと、そのような考えを示してしまった。最早、殺さざるを得ない。……時空干渉なのだぞ。悪用される状況を考えなかったのか、紅林」
誤りを指摘するように、佐野は言う。紅林が落としたナイフを拾い上げると、刀身をスーツの裾でぬぐい、切っ先に己を映して構えた。同輩のよしみか、すべて説明した上で手を下すつもりであったらしい。
そして今、説明は終わった。嘆息して、佐野は真帆の傍を離れる。
「M2プランはACOのように災厄を回避するだけではなく、むしろ災厄を生みだすことにも使えると、なぜ考えが回らない。みだりに外国へ持ちだすべき研究でないと、なぜわからない」
「……俺は、ただ。六年前の時も、今も。ACOの外だって、研究はできると、思って……」
震える声音に、自分でも驚いた。折れた心を表す震えは、いつの間にか全身を覆っている。
振り返ってみれば、職としてこの道を選んだ時も、そうだった。震えて弱弱しい声で、紅林は如月に頼んだのだ。自分を雇ってくれないか、と。ACOを抜け、寄る辺もない自分の身の程を四年かけてようやく思い知って、情けなくも懇願したのだ。
真帆との思い出が呼び起こされたことを皮切りに、次々に想起されていく、記憶。それは今の紅林にとっては都合の悪い、思い返すも苦しいものばかりだった。孤独になれど孤高に生きることには敵わず、行き場を求め、一人では無理だと悟り。そこからは転落の一

途である。
　真帆と出逢った時に抱いていた決意さえ、忘れてしまっていた。
「功名心に頭を侵されたか、馬鹿が。やはり堕ちたな、貴様。黄泉路を付き合わされる如月が不憫でならない。研究とは、己の興味・好奇心が第一であることこそ許されど、名誉欲が第一ということは許されん。成果は、見知らぬ誰かも含めた他者のためにこそある。なぜなら人は社会的な生物であり、けして一人で生きてはいないからだ。共有されぬ研究など財産ではない。分かち合えぬ成果など独りよがり。少なくとも貴様は六年前、この矜持を捨てた時点で、研究者として死んでいた。無意味だった研究の可否を問うまでもなくだ、紅林！」
　振り下ろされるナイフの側面に映る自分の目を見て、紅林は悔やんだ。
　濁りきった目玉。卑屈に歪んだ表情。いつからか、いつから自分はこうも腐ってしまったのか。答える声は無い。すでに己でわかってしまったからだ。六年の歳月をかけて、なりたくなかった『大人』の姿が、いま己の形をとって表れていた。
　……では。
　六年前から現れたこの少女は――多少軽率でも、自分の望む自分であれた、あの頃の自分のように。自分を誇れる？子供？なのだろうか？
「なんのつもりだ亘理」
「殺さないで、佐野」
　どうやったのか、瞬時に佐野の前に立ち塞がった真帆は、ナイフを握る右手を押さえながら静かに口を開いた。ナイフを持ちかえて、なおも進もうとする佐野を全身で押しとどめながら、言った。
「殺さないで。殺す必要、ない」
「どけ、邪魔立てするな」
「わたしはちゃんと、戻るから！　ＡＣＯに、戻るから。だからお願い、リンゴと三月さんを、殺さないで！」

「事はそれで済む段階ではなくなったのだ、亘理。元よりこいつは野に下る前から危険視されていた、稀代の麒麟児。お前と同じく、野放しにしてはおけん存在だ」
「そうだよ、リンゴは一国候補だったあの中でも、頭一つ抜けてた！　でも、それを言うんなら……！　そもそもわたしがＭ２プランの運用に際して完成させた理論だって……」
佐野の行く手を阻もうと、真帆の伸ばしていた手が、少しずつ下に落ちていく。つまり力がどんどんと失われていることを示唆していたが、佐野は動きを止めていた。不可解だという顔をして、自分の胸までしかない真帆の頭頂部を見下ろしている。
力なく、うなだれた真帆は、佐野のスーツの裾をつかんだまま腕を震わしている。やがて、意を決したかのようにその腕に力を込め、震えが少しだけ収まる。その間に、彼女は少しだけ顔を上向けて、声を振り絞った。
「あの理論、だって……あの日、リンゴが話してくれたのが、原型、なんだから……」
身体の震えを押さえた分、声音が震えて語尾が途切れた。
紅林の震えが止まる。真帆を見る目を丸くして、語の意味を理解しようと必死になった。
「なに……？　どういうことだ、亘理」
「だから、わたしの理論は……着想を得たのも、核になってるのも、リンゴが話してくれた理論なの」
「お前、盗用、したというのか」
佐野がたじろぐと、真帆は裾から手を離し、胸に両手を叩きつけた。体格も貧相な真帆の一撃で押されるはずはないが、佐野は後ろにひいた。真帆が顔をあげた途端に、退いた。
「だってわたし、真術師になりたかった。どうしても、なりたかったの」
わずかに後ろを向いた真帆の形相は、真剣で、暗い感情を帯びていた。佐野はこれに気圧されたのだろう、と紅林は思った。

「でも佐野も知ってるでしょ、リンゴも思い出したでしょ、わたしには……才能なかったって！　そりゃ一国には成れたよ？　でもその中では落ちこぼれた！　バレッジの適性があったのか、魔力だけはあったけど。そんなの、体よく使われる魔力の容器でしかなかった……！　そこに、偶然リンゴが来た。教員からも馬鹿にされたわたしの夢を、笑わずに聞いてくれた。わたしの夢を、守ってくれた」

ほんの少しだけ、頬を緩めた。けれどすぐさま激情の色に塗りこめられ、柔らかな表情は消え失せる。紅林が記憶を掘り返そうとした思考をも押し潰すように、真帆が悲痛な声で叫んだ。

「あの時、リンゴが話してくれた理論。それを聞いた時……なにか思い出したみたいに、わたしが考えてた理論と繋がったの。もちろん穴はあったけど、少しずつそれを埋めて、仮説として提出したよ。そしたら、他の人が検証してくれた！　証明してくれた！　やっとわたしは手に入れた……真術師になるための道を。あとはバレッジ適性あったおかげで、とんとん拍子だよね。リンゴがＡＣＯ出て一年もしないうちに、わたしはＭ２プランの実行者になれた」

持てる言葉を吐きだし尽くしたように、荒くなった息を押さえて真帆は佐野を睨みあげる。

「どうなの。それなのに、リンゴを殺すの。Ｍ２プランの原案を作ったひとなのに」

「だがそれならば……なぜだ。なぜ共同研究者として紅林の名を出してやらなかった」

動揺する佐野が問えば醜く歪んだ表情で唇の端を吊り上げ、真帆は紅林へ流し目を使う。

「そんなことしたら、稀代の麒麟児はやっぱり神童だった、ってみんな掌返してわたしから離れてくでしょ。どうせまた、わたしに残るのは魔力タンクの役目だよ……そんなのいや。だから言いだせなかったの。でも謝りたかった。今は言えなくてもいつか、どこかの未来で、って思ってた……」

まだなにか続けようとしていたのか、しばし口は開けたままだっ

たが、次第にすぼまって閉じ、真帆は黙り込んだ。佐野からも、紅林からも目を逸らしたまま、黙ってそこに立っていた。やがて最初に佐野が動き、手にしていたナイフをくるりと半回転させ、袖口にしまう。魔力の壁も解除し、真帆の横を通り過ぎた。

「……事実であるとすれば、いささか対処に困る事案となる。この場は一旦退くぞ、紅林。第三でのお前の実験内容と、研究所に保管されている最初期からのお前の研究資料などを参考にさせてもらった上で、改めて処断することとなるだろうが、いいな」

「……好きにしろ」

「如月についても、同様だ。先ほども言った通り、お前と共に外国へ高跳びされる危険性があったため、持ち逃げされぬようバレッジを破壊するほど追い詰めはしたが。M2プランの元がお前の研究ということは、ACOに在籍していた頃から共に行動していたあの女が一枚噛んでいる部分もあるかもしれんしな。保留しておく」

「……救急呼んどいてくれ、あいつ、ろくな止血もできてねぇんだ」

かろうじてそれだけの返答を口にした紅林は、自分の脇を佐野が通り過ぎた途端、壁にもたれて崩れ落ちた。

「引き受ける。だが、ひとつ覚えておけ紅林」

踊場のところで足音が止まったため、紅林が振り返れば、佐野は忌々しげな顔で紅林の顔を認めたあと、視線を外して階段を下りはじめ、言い放った。

「たとえ亘理の話が事実だとしても……欲にまみれて研究を行うお前を認めんぞ、俺は」

返す気力もなく、首を元の位置に戻した紅林は、遠ざかる足音に安堵し、そんな自分を嫌悪した。まったく言い返すことができず、佐野の言い分を認めざるを得ないと感じている自分に、気付いたためだった。

「……ふざけんな」

小さなつぶやきに、真帆が身をすくめる。紅林はその様を見て、なにも得られないと気付きながらも、少女の怯えに小さな復讐の愉

悦を感じ、繰り返した。
「ふざけんなよ」
込み上げた笑みに震えが混じり、紅林は、三月のところへ救急隊員が駆け付けるまで、一人ぐすぐずと笑い続けた。真帆が自分を見ている気がしたが、うつむいた紅林には、結局彼女の表情を知ることはできなかった。

7　過去との対峙

「……師匠、あたしが帰ってきたら、組手に付き合ってもらえませんか？」

地脈断層大地の外部より帰還し、三日が経ち。登校前の律希と朝食を食べているとき、そのように訊かれて紅林は新聞から顔をあげた。この三日間、戻ってきて以来真帆をはじめとして誰とも顔を合わせようとしない紅林の拒絶する様子と、紅林と真帆を監視する黒服の男たちに威圧を受けてか、律希はずっと屋敷の中で黙っていた。

しかしとうとう耐えきれなくなったのか、こうして話しかけてきた。紅林はじっと律希を見据えたが、おもむろに新聞を畳む。そして無言の食卓にはコーヒーをすする音だけ、次いで常用する錠剤を飲み下すと、ほとんど手をつけていない朝食を残して席を立った。紅林は律希の横を通り過ぎざまに、肩に手を置く。

「師匠」

「これ」

肩から滑り落ちて、手の中にころりと、つめたい物が落ちる。

「やる。これからは、稽古に付き合えないだろうしな。授業料返還だ」

五百円玉だった。いつも組手などに付き合う際に、要求していた授業料。もはや教えること自体なくなる可能性が見えてきていた紅林は、いつも請求していたそれを返すことにした。

「ちょ、ちょっと師匠」

「これで、おしまいだ。今後の進退……そう、進むか退くか、いずれにせよ状況は変わる。俺は今までどおりここにいることは、もうできねぇだろう。だから師弟関係も解消する。もう授業料は払わなくていい」

「まってくださいよ！　だって師匠、授業料って言ったってこれ……そもそも、なんでですか！　なんで急にいろいろおかしくなっちゃったんですか！　師匠は沈んでますし、まほらちゃんもしゃべってくんないですし、三月さんは入院しちゃいますし！」
「なにもかも一切合財変わっちまったんだよ。転機ってのは、突然くるもんだ」
背を向けたまま律希に言って、冷たい大理石に足音を響かせる。
食堂を出たところに黒服の男――ＡＣＯから差し向けられた監視用の手先、通称？部隊？の人間が立ち尽くしていた。以前真帆を連れ戻そうと現れた者たちとはまた別の組織であるそうだが、常に武器を向けられていると錯覚するような威圧感といい、鍛え上げられた逆三角形の体躯といい、単なる監視に終わらない連中であることがうかがえる。
紅林と真帆が余計なことを言わないか、逃走の企てをしていないか、見張っているらしい。もっとも、そんな気力など露ほども湧かない紅林としては無駄な人件費を割いているとの感想しか出てこないが。
なんとなく、軽く会釈しながら男の脇を通る。と、男が眉をひそめた。監視対象である自分からそのような所作が出てきたことが不思議だったのだろうと推測を広げたが、一秒もしないうちに紅林はその憶測を撤回することになった。左の肩甲骨に、激痛が走る。先日の戦いで、佐野のナイフに傷つけられた位置だった。次いで口から、声でなく音がほとばしる。
足音も気配も消した律希による攻撃だとは、振り返るまでもなくわかっていた。だが振り返る。右と左の掌底が、続けざまに紅林を襲う。ほんの四日前に教えたばかりの技術を拙いながらも再現したのか、上下の唇は固く結ばれ攻撃の予兆を悟らせない。加えて瞳もぎゅっと閉じられていたため、視線から攻撃の先を読むこともできなかった。
一年かけて仕込んだ弟子の動きは、紅林の予想をわずかに上回り。

積み重ねが生んだ流麗な動きは、紅林の胸部を捉えてすんなりと打ち抜いた。それは打撃というよりも、至近距離で力を発した突き飛ばしといった方がいい。一撃目で崩され二撃目により後ろに転ばされ、尻餅をついて弟子を見上げる。

「教えた通り、練習したんだな、律希」

「今日の師匠が、隙だらけなだけです」

「ああ、みたいだな」

「どうしてですか」

「……なんでだろうな」

頬があがり目元に皺が寄り、表情に曇りができることが自分でもわかった。律希が尋ねたのはなぜ紅林がここを去らんとしているかについてなのだろうが、ここ数日悩み続けていた彼にとって「なぜ」という問いは幅広く様々な問いかけに聞こえたためだ。

なぜ、こうなってしまったのか。なぜ、自分はこうなったのか。転落し続けて決意も失い、惑い迷って研究に傾倒し、いつしか、こう在らんとしていた姿の対極に位置するような人間に、自分の身を堕としめていた。気付いてしまえば、もう逃れられない。

佐野の言う通り、紅林吾朗は堕ちていた。そんな己がどうしようもなく憎く、歯がゆい。

だから。

「とにかく師弟はもう終わりだ」

「なんで、どうしてなんですか」

「最初に教えを請われた時も言ったろ。俺はそう高い目標とも言えないから他あたれ、って。……実際はその程度じゃなかったんだよ。そもそも俺は、人にものを教える以前の人間だったんだよ」

「なら一年も師事して学んだあたしはなんですか？　大体、ものを教える以前の人間だったとかって、そんなこと言われたってですねぇ……それじゃ学ぶたびに『あたし、強くなれてる』って噛みしめた感情も、師匠の言うところの？その程度？ってことになるじゃないですか！　もしこのまま師匠が自分を否定し続けたらですよ、あ

たしの努力とか感情まで、ぜんぶいっさいがっさい否定することになるんですよ！　迷惑だからやめてくださいよ！」
今度は止められることが前提の蹴りだった。へたりこんだまま掌で受け、いなして、なにも返せずにいるうちに、律希は拳を握るか握るまいか逡巡するように指をうごめかせた。
「あたしにとって、あの日の師匠は高すぎるくらいの目標で……だからっ……」
拳を握るまま、律希は部屋に去る。黒服の男は黙って事の成り行きを見守っていただけで、床で尻を冷やす紅林に手を貸すことも、声をかけることもしない。すがすがしいまでの職務精神に心の中で敬服しながら、紅林はしばらくそこに居座り続けた。投げかけられた言葉を心に浮かべると、三日間悩み続けている問いかけに、もうひとつ追加された。
なぜ。
なぜ、俺なんざ師匠にしたんだ――馬鹿め。
そうやって座ったままの紅林に声をかけたのは、小奇麗に洗濯した白衣に身を包む玖珂だった。外から帰ってきた日に一度顔を合わせて以来、彼はまた製作のため自室に引きこもっていたのか今日まで姿を見かけることもなかったので、驚く。玖珂は普段から猫背なので姿勢にあまり大差ないように思えるが、座る紅林に顔が近付いたので、わずかに屈んだと見受けられた。相変わらず顔色は優れないが、珍しく真面目な面持ちであった。
「紅林くん、少し出かけるぞ」
「どこにだよ、教授」
「三月くんの見舞いにきまっとるわい。三日も経ち、多少は落ち着いてきた頃合いというものだろうしな。病室も、個室となるとだいぶ金がかかるのだ。早めに出ることができんか聞いておくのも悪くはない案だと思うのさ」
「そうか」
「うむ」

ホールを縦断し、踵が潰れた靴を履くとドアノブへ手をかける。あいた隙間からは、涼しい風が吹き込んだ。乾いた瞳をしばたたかせると、ノブから隙間へ手を移動させていた玖珂が、振り向いて下唇を突き出す。

「なにをのろのろぼさっとしているのだね、紅林くん！」

「は」

「葉、ではないぞ！　出かけると今さっき宣言しただろうに、もう忘れたと口にするつもりだとは恐れ入るね」

どうやら紅林も誘うニュアンスで言っていたらしい。だが三日間も外に出ていなかった紅林は、そもそもからして外出に許可がいるのかすら知らない。そこで応答があるとは期待することなく後ろに立つ黒服の男を見ると、意外にも男は首を縦に振り、動作の中で自身の腕時計を確認すると「十七時までには御帰宅願いますよ」と告げた。

＋

薄暗い病院の廊下には、行き交う人々の発する独特な空気の匂いが満ち満ちていた。明るい街中で楽しげにしている人々の発する空気とは対極、沈んだ気分が澱のようにこごっている。

三月の部屋がどこにあるかは、尋ねるまでもなかった。廊下に向いた扉の中で、黒服の男が陣取っているところが、それである。そこだけ空気が一層重苦しくなっているが、目の前を通る医師や看護師さえ意にすることなく、彼らは与えられた職務に準ずる。

当然、扉に近付いた玖珂と紅林も押し留める。けれど臆することなく玖珂は手を払いのけ、扉を素早くノックする。それから黒服の男を見て眉を八の字にして笑みを浮かべ、片手で拝むようにした。

「青年、通しちゃもらえんか」

「申し訳ありませんが、面会謝絶となっています」

「んな馬鹿な、そもそもあの女傑が脇腹に穴あいた程度で寝込むと

は思えん」
「いえ、昨日までは本当に危ないところで」
「あぁん？　急所は外していたと聞いとるぞ」
「し、しかし……」
玖珂の言い分に、男は弱った顔で応対しようとしていた。
実際のところ三月はこの三日、意識朦朧として寝込んでいたのだが、人体としての急所は外していたため紅林はこう説明する他なかったのだ。バレッジは盗難及び破壊を避けるべく、収納場所については一級国家偽術師以外に知らせることは禁じられていた。
仕方なく、紅林が進み出る。
「通してくれませんかね。俺たち、今回の件に関わりがあるんですよ」
言ったとたんに、男は自分の持っていた情報端末を操作し、紅林の情報を改めてから、空間把握でパスなどを読み取ったのか横にどく。玖珂は自分の時との対応の違いに毒づいていたが、ともかくもこれで通れるのなら、と最終的には納得した。
「どうも」
扉の先にかかるカーテンを右に滑らせる。ユニットバスのドアが左手にあり、その奥のベッドで、三月がじっと紅林を見据えていた。顔は青白く肌は荒れ、髪もぼさぼさと広がって、普段の凛としたたたずまいは欠片も残っていない。ただ疲れた様子が形を取って、ベッドの中に横たわっていた。
だが少なくとも意識ははっきりしているようで、かつて同じ状態になったことのある紅林は峠を越したことを知り、ほっとする。
「……この時を、狙ってきたのかい」
なぜか布団を鼻先まで持ち上げた三月は、目線を紅林から外さないままに問う。なんのことを言っているかわからず首をかしげると、ベッドの脇にある棚の上に載った洗面器に一瞬だけ目を走らせ、またすぐぱっと紅林に目を戻す。険しい、目つきだった。
洗面器はほわほわと湯気をあげており、中にはタオルが浮かんで

いる。
「……自分で言ってて恥ずかしくならねぇのか」
「若干」
「あっそ」
「やあ三月くん、見舞い品などを持ってきたぞ！」
個室に入ったため少しは声を大きめにしてもいいと判じたのか、玖珂はメロンを掲げながら早歩きでベッドを目指し、パイプ椅子に腰掛け早速みかんの皮むきを始めた。玖珂の登場に三月は驚いた様子だったが、ややあって起き上がった彼女はゆっくり布団から上半身を出し、青いパジャマ姿に桃色のカーディガンを羽織った。紅林も玖珂の横に腰を下ろす。
「怪我の具合はどうだね、はらわたには傷がないと聞いたので果物類を持ってきたのだが！」
「ありがとう教授、傷はしっかり縫い合わせたし、食べることも日常生活にもさほど支障はなさそうだよ」
「重畳、重畳。食事は人のすべてのはじまり、すなわち創作の起源である！　生きるとは戦いであり、腹が減っては戦はできぬ。つまり腹が減っては生きられぬ！」
「当たり前じゃねえか」
少し呆れを覚えながらも紅林が言うと、玖珂はちらりと横目で紅林の顔をのぞきこんで、またぴりぴりとみかんの皮を細長く伸ばしていく。その先端が、床へ近づく。
「だが紅林くん、昨今は当たり前をないがしろにしがちな人間が多いというものさ。当たり前のことをわかりやすく説いて自覚させるところから始めなければならん。初歩からはじめにゃ応用が理解できんのと同じ。いや実のところきみらのように理論立てて考える人間ほど、芸術には理解があるものだよ？　芸術も普遍的なよくあるものという初歩から偏在する奇怪の境地まで進み、ぎりぎり受け入れられないラインを世に送り出すのが仕事だからな！」
「受け入れられないラインなのか」

「無論だ。巨匠は死して名と作品を残す。大衆に完全には受け入れられず、どこか反発をあおるほどに現行の形態を打破するものが芸術と呼ばれる。だが打破しすぎてはならない。小学生に百キロ先までマラソンしろと言うようなものだからな。二キロほど先、頑張れば理解へ辿りつけそうなところに、そっと足跡を残すのが芸術だ！
故にクリエイターは即物的な思考は捨てよ。理解が追い付き価値が出るのは後々になることを覚悟し、未来を見て生きるのだ」
未来、という言葉が、今の紅林には少々重かった。この先で自分が辿りつける場所は、そしてそこで道が交わるだろう真帆が見るものは、なんなのだろうか。そんな考えが頭をよぎり、四辻で歩みを止めている自分の後姿を見た気がした。
「で、未来の話だが。三月くん退院はいつごろだね？　あまり個室を使い続けると金がかさむぞ。怪我が大したことないのなら、せめて大部屋に移るなどしたらどうなのだ？」
みかんを注視していた玖珂は動きを止めた紅林に気付くはずもなく、今度は三月の方へ顔をあげて問う。この問いに紅林も目を向けると、三月が眉を緩やかに下向きにしならせた顔でこちらを見ていた。
「怪我は、さほど気にならないのだけれど。まあ、ただ、少しね」
「……んん？　懸念すべきことでもあったのかな？」
目配せされた紅林は、玖珂には伝えるべきことでないと、小さく首を横に振って見せた。これを受けて三月は肩をすくめ、なんでもないとの旨を玖珂に告げる。先ほど洗面器が載っていた棚の端を見ると、紅林が常用するのと同じ薬が収まった紙袋が、かさかさと軽い音を立てて揺れていた。
――魔力は魔力同士互いに引き合う性質を持つ、この世のあらゆる物体に宿る粒子であり、それは人も例外ではない。というより、空間へ作用する粒子・すなわち魔力が食物連鎖などによりすべての物体の間を行き来するからこそ、物体は形を保てるのであり。偽術の過剰な使用などにより大きく魔力を失えば物体は形を保持できず、

やがて崩れ去るということがＡＣＯの研究で明らかとなっている。
紅林と三月は一級国家偽術師となった際に体内へバレッジを埋め込まれることで、本来人体が宿す量を大幅に上回る数値まで魔力を蓄積できる体質に変化した。だが限界量を向上させられることは同時に、最低限の身体を保持するために必要な魔力量をも増やすことに繋がった。
そのためバレッジを失ったいまの二人は、普通の生活の中で己の持つ魔力に引かれて集まってくる魔力だけでは身体を保つことができないと宣告され、支給される錠剤を常用することで魔力を補給せざるを得ないのである。
「ま、なんにせよなるだけ早く出てきてくれたまえ。家事当番のサイクルが紅林くんと律希くんのみで回っているのでな！　二日に一度はまずいメシというのはいただけない！」
「ならテメエで作れよ教授。俺も律希のまずいメシはうんざりだ」
「……ははん。ろくに食べてもいないくせによくそんなセリフが出てくるものだね！」
さらりと言い当てられたことに驚き、どきりとして、紅林が玖珂の手元を見る。玖珂は器用なもので、剥かれていく皮は幅を広げたり狭まらせたりしつつも途切れることなく続いていく。りんごの皮むきのように、ひとつの帯の体をなしてするすると床に落ちた。彼がこちらを見てもいないことがわかった。
「なんで知って……あんた、製作中で部屋出てないんじゃ、」
「長いこと一緒に生活しているのだから、顔見りゃわかるのさ。ちゃんと鏡を見ているかね？　身だしなみは整えているかね？　眠れていないようだし、一挙一動が鈍いぞ。紅林くん、きみの方がよほど三月くんより病院にいるべきと見えるよ」
自分で思っているより、紅林は弱っているようだった。律希とは多少なりとも接する時間があったために、態度などから露呈するかもしれないと考えてはいたものの、部屋に引きこもっていてほとんど出くわしていない玖珂に不調を言い当てられるとは、思ってもみ

なかった。
「三月くん、きみもなにか隠しとるように見えるな」
「わ、私が？」
鋭い洞察力の矛先は三月に向くが、玖珂の態度はなんら変わることなく、彼の視線はみかんの皮むきに集中している。二個目もみるみるうちに皮をほどかれていき、その間淡々と玖珂は語った。
「怪我よりも気に病むことがあるという顔なのだよ。まったく、見舞客が来た時くらい明るい顔をしてみせるという気概はないのかな？　写真映りもそうだが、作り笑顔のヘタさもここまでくるとある種の芸術だ！」
かはは、笑い声をあげて玖珂はみかんを剥き終えると、三月と紅林にひとつずつ手渡して、パイプ椅子を畳むと扉に向かった。紅林の目と言葉が、玖珂の後ろを追いすがる。
「おい、教授」
「込み入った事情かなにかがあるのだろ？」
振り向いた玖珂は片方の犬歯だけ剥くように笑ってみせて、白衣の裾を翻す。
「俺はただの大家として、入居者の様子を見に来ただけだよ。ただ俺は大家であると同時にきみらの友人でもある、話せる事柄であり助けを要するのであればいつでも話してくれたまえ。……律希くんも、おそらくは同じ思いだろうがね」
最後の言葉は紅林と律希のやりとりを知っていてのことだろうか。問いかけようとしたものの言葉がまとまらないうちに、玖珂は部屋を後にする。締まる扉の音に外と隔絶された二人は、向き合ったやりきれない気持ちを溜め息に託した。会話を再びはじめようと試みるが玖珂の残した空気がそれを阻んだため、ひとまず紅林は研究業務についての話から入る。三月はみかんを食べながら話を聞いていた。
「代理所長は、山井に任せた。お前がある程度回復するまで、一カ月くらいはあいつでもやっていける。業務はローテーションさせな

がら、俺を中心に回すつもりだ」
「そうかい。山井はなにか言ってた？」
「遠回しに『紅林が怪我して所長が助かってりゃよかったのに』と言われた」
「あいかわらずあんたは嫌われているね」
「四地が一国とつるんでんだ、三国のあいつからしたら気に食わないだろ」
理解はできるが受け入れられない表情の紅林に、三月が声を低くして返す。
「四地でなくなるかもしれないけどね」
「……なんだって？」
「さっき、ＡＣＯから通達が来たんだよ」
「通達、ってことは、処分が決まったってのか」
「まだ完全に決まったわけではないらしいよ。でも近日中には最終決定が出るだろうから、後ほどあんたのとこにも連絡行くって。いずれにせよ、私もあんたも今の場所からは異動だろうからね。代理所長様から代理って言葉がとれるわけだよ」
「降格、か」
「私はそれほど地位に固執してないからいいけれど。あんたは……どうなるだろうね」
「どうでもいいよ、落ちようが堕落しようが」
あっさりと従い何も言わなくなった紅林に、三月は怪訝な表情を浮かべた。玖珂の置いていったみかんを食べる手を止め、紅林の目を見る。
「本部行きが遠のくかもしれないのに、ずいぶん落ち着いているね」
「あ？　……ああ。さほどこだわる事柄じゃ、なくなったんだよ」
「嘘でしょう。ならあんた、なんのために今まで研究を積み重ねてきたんだい？」
質問への答えは、むしろ紅林が教えてほしいものだった。空虚なハリボテのように、紅林の目指していた形は崩れ去る。六年の歳月

を経て少しずつ崩れていたそれに、紅林は気付こうともしなかった。手段を目的と同一視するようになっていた自分を、正そうとできなかったのだ。
「なあ三月、ならお前はなんで研究を続けてるんだ」
「どうしたの、急に」
「いいから答えてくれよ」
挑むような語調に気圧されてか、三月は真剣に考え込む。自分に出せない答えを三月が持っている、とは紅林も思っていなかったが、少なくとも自分のように迷い戸惑う姿を見せつける人生を歩んでいるようには見えなかった。
じっくり考え込んで、三月は結論を見出す。
「あんたがよく知ってるはずだよ」
「知らねえよ。知ってたのかもしれないが、もう覚えてねぇよ。いま教えてくれ」
「思い出せるよ。忘れたのかもしれないけど、どこかで覚えてる。私があんたと再会した時は、もうほとんど忘れてたみたいだけど」
真摯な態度を小揺るぎもせず保ち続ける三月は、強い瞳で紅林を見つめていた。
では、再会する前、ＡＣＯにいた時に自分は三月から聞いたのだろう。そこから流れ長い月日を経て、紅林の記憶は擦り切れてしまった。……いや、都合の悪いことは忘れてしまったのだ。佐野と向き合い思い出させられた記憶のように、自分の弱さごと包み隠して、思い出さないよう封じ込めた。己に向き合うことのできない弱さに、紅林は歯噛みする。
「なんでお前、再会してすぐ、俺なんかを雇う気になったんだ」
「なんだい吾朗、今日はいやに昔のことにこだわるね……それはあれだよ、ほとんど忘れてても、あんたがなにも変わってないと思ったから。あんたが根底で考えてることは、なにも変わっちゃいなかったからさ」
はにかんで言う三月の目には曇りがなく、そのことが逆に紅林に

は辛かった。自分はそんな目を向けてもらえるような人間ではないと、いまはそう思えてしまったからだ。
「そういえば、まほら、もとい真帆、か。ＡＣＯの偽術師だったとは……でも、変わらないといえば、あの子が一番変わっていないのだろうね。思い出したよ、私も」
「気付いたのか」
「ＡＣＯで私は年長者で上の階位にいたから直接言葉をかわしたことは少ないけれど、佐野のいっていた言葉を繋ぎ合わせればある程度予想はつくよ。六年前ＡＣＯにいたあの子は、どんな方法によるかは知らないけれどＭ２プランという時空転移実験に加わり、被験者としてこの時代に飛んできた、ってことだろう？」
紅林はうなずく。三月はここでふむ、と考え込み、記憶を探っている様子であごに手を当てうつむいた。
「問題はあの子がＭ２プランに携わるようになった経緯だけれど……あの莫大な魔力量が要因かな？　六年前ということは大竜事変とも関係があるのかもしれないけど、まず術者自身に相当の魔力がなければ地脈からの魔力牽引はできないし、だからこそ私たちも転移実験を足踏みしていたのだからね。それにしてもＭ２プラン自体を生みだしたのは、いったい誰なんだか」
「俺だよ」
間をおかず即答すると、三月は心配そうな顔で紅林を見た。彼女の憂いを払いのけるように手を振って、紅林は説明を続けた。
「六年前の当時、お前が俺に魔力粒子の重力子化研究の成果を自慢してたのと同じだ。俺もあいつに研究のことを話してたんだよ。あいつがそれを盗んで自分の理論として提出し、他者の検証で認められちまった。……そしたら重大すぎる研究ゆえに表に情報が回らず、なにも知らない俺は無意味な研究を六年にわたって続ける羽目になったってことだ」
「ほ、本当に？　それなら、むしろあんたのことを評価する動きも出るよ」

「かもな。でも、もういいんだ。どっちでも」
立ち上がって窓際に寄った紅林は射しこむ光の中に立ち、外に広がる光景に目をやる。立ちふさがる断層の壁がこの病院の近くにも見られ、遠く連なる縁をなぞるように、窓を掌で拭いた。
「俺は、なにを追ってたんだろう。なんのために研究を続けたんだろ。今じゃもう、わからねぇんだよ。長いこと続けるうちに、目標をなくしちまったんだ。もう居場所なんて関係ない。どこで、手段を目標とはき違えたんだろうな……俺は、なにを目指してたんだ？」
窓を拭いていた掌が拳に変わる。ガラスに映る三月は、ひどく苦いものを噛みしめたような顔で、紅林の背中を見ていた。目線が合うのが怖くて、手元を見据えてやり過ごす。冷たいガラスに冷えた指先が、握力にしぼられて白くなっていた。
「……悪い、変なこと話した。落ち着いたら、また来る」
弱音を吐露してしまったことが居たたまれなくて、その場で踵を返して早歩きで扉へ近づいた。扉に手をかけたところで吾朗、と呼ばれて、動きを止める。振り返る紅林だが、バスルームのあるスペースが視線を阻み、ベッドの方は見えなかった。その方が、ありがたかった。
「ＡＣＯを去ったあとの四年間、私と再会するまであんたがなにやってたかは知らないけど。変わってないよ、あんた。すぐわかった。私がそうだったように、律希もあんたに影響されてた。そんなところがあるんだよ」
「俺に、影響だと。お前にせよ律希にせよ、俺のなにでどう変わったってんだよ」
「そこだよ、まさにそこ」
やっぱりあんたは変わってない、と三月は言う。理解できない紅林は、かといってこれ以上この場に留まっても紡げる言葉ももたないため、手をかけた扉の向こうへ出た。
頭を冷やそうと歩き出すと、左手の壁に背をもたせかけた人影が視界に入る。てっきり外にいた玖珂だと思いきや、人影は白衣では

なくダークスーツをまとっており、冷淡な視線で紅林を睥睨した。
「処断の仮決定について通達だ。こちらへ来い」
見下ろす佐野は、さも面倒臭そうに紅林に言い、先導して歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8211u/

まほらジカルテット

2012年1月3日03時10分発行